あなたは笑ってくれますか？

猫海月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
あなたは笑ってくれますか？

【Ｎコード】
Ｎ１９６３Ｗ

【作者名】
猫海月

【あらすじ】
浮気性の吸血鬼と一途で彼女のためならなんでも殺っちゃうぞ☆な少女がバカップルしたりする、殺伐ほのぼのラブファンタジー
同時進行にちびっこことかが旅する話
嘘は何割？

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（前書き）

間違って短編にしちゃったぜ！
初めましての方は初めまして
お久しぶりの人はお久しぶりです

連載始まりました～

近作…というか他全てですが世界観、キャラを他作品と共通してます
別に知らなくても問題はないと思います
ではでは

人物表

エウナ
吸血鬼　初代主人公　主人公の癖に色々不遇な立場

楓
巫女さん　元祖ヒロイン的な位置　死んだりメイドしたり死んだり
巫女したり

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか

「ボクが居なくても、あなたは笑っていてくれますか？」

月明かりの下、そういって彼女は微笑んだ。

□　□　□　□

目を覚ますと、目の前に狐のお面があった。

お腹のほうに軽い重量を感じることから考えると、どうやら馬乗りになられているらしい。

「…」

見詰め合うこと数秒、そのお面は何を思ったのか私の顔目掛けて降下してきた。

「っ！」

すかさずお面へと炸裂する黄金の右腕、もとい右ストレート。

「っー！っー！」

謎のお面は緩やかに吹き飛び、壁に頭をぶつけて声にならない様子で悶絶している。

というか今の飛び方、絶対重力無視してるよね！？何時からコイツは自然の摂理を無視するようになったのかしら？

とはいえ、窓のほうを見れば日は暮れており、何時までも布団の

中で惰眠を貪る気も無い。そもそも眠くないし。
身体を起して軽く身だしなみをチェック。服の乱れは無いし、どうやら襲われてはいないみたいね。

「ほら、さっさと演技はやめて起きたら？」
「…ばれてました？」
「ばれてました」

どう見てもわざとっぽかったし。

「ぶーぶー」

そういってそいつは立ち上がると、狐のお面を大切そうに壁へとひっかけた。…それ、私のなんだけど。

「おはようございます、エウナさん」
「今はこんばんわじゃない？まぁおはよう、楓」

楓は大人とも子供にも見えるような不思議な容姿に黒くて長い髪、そして何故か巫女服を着てニコニコと笑いかけてきている。

「ではではエウナさん」
「…」

そして彼女は私が立ち上がるのを見るや否や、両手をぐっと私の方へと差し出してきた。
始まる静寂。止まる時。何？整列？

「…なに？」
「おはようのぎゅー♪」

私はニコニコとした顔のまま手を出してくる楓。
ああ…なるほど。
そして私は彼女の元へと歩み寄ると、その細い身体を抱きしめた。

「ほらほらー、ぎゅー」
「ああっ！痛いです！だめぇ！折れる！大切なものが折れちゃう！」

その後も笑顔で万力の如く力を込めていくと、やがて楓から何かを砕くような嫌な感覚がしてぐったりと崩れ落ちた。
崩れ落ちた楓はそのまま首をぐるりと１８０度ほど回転して私の方を見ると、ぱくぱくと喋り始めた。

「もー！酷いじゃないですか！本体なら死んでましたよ？」
「…お願いだからソレで喋るのやめてくれない？」

腰が砕け、首だけ回転してる人型が喋っている様子は、はっきり言ってめちゃくちゃ気持ち悪い。

「腰砕いたのエウナさんじゃないですか！きちんと痛みは伝わるんですからね！」

そういうと、楓からしゅわしゅわと煙が出てきた。後に残ったのは人の形をした紙切れのみ。
その様子を最後まで見届けずに扉を開けると、そこには先ほどまで私の前に居た巫女服に
赤いコートの少女が座っていた。

「何してるの？」

「こ、腰が痛くて立てないんですよ」
「そう、お大事にね」
地面に倒れる赤いコートに声を掛けると、そのままリビングのほうへと歩き始める。
「そんな！助けてくださいよー…」
後ろから聞こえてくる声は聞こえなかったことにして、さっさと行こう。

□　□　□　□

元々家具の少ないリビングに置かれたソファに座っていると、廊下の方から何かを引きずる様な音が聞こえてくる。
時と場合によってはホラーにも見えるけれど、音の発生源は判りきっているし怖がることじゃない。
「うーらーめーしーやー…」
「あ、来たなら紅茶お願いね」
「ぶーぶー！」
楓はしばらくの間びったんばったんと騒いでいたが、やがて疲れたのかのそのそと動き始めた。
見るに耐えなくなって目を逸らした場所にある、大きな一枚窓からは月明かりが差し込んできて、とても幻想的。
「紅茶の温度は熱帯魚ー♪」

台所から意味不明の歌が聞こえてくるけど、聞かなかったことにしよう…。
テレビも付けれないのでそのままぼーっと待つこと数分、湯気の立ち上るカップを二つ持った楓が戻ってきた。

「腰は平気？」
「ふっ…じこしゅーふくきのうを身につけたボクにとってこの程度の痛み！愛にしかなりません！」
「そう、紅茶ありがとね」
「ぶーぶー！」

ぶーたられるのは本日何度目かしらね？
とはいえ、子供と面倒事は放置しておくに限る。

「子供じゃないもん！」
「…」

ぷっぷくぷーと膨らんでいく楓爆弾。私的には爆発までの秒読みが始まってないことを切に祈りたいところ。
とはいえ、そんなバカなやり取りをしている間にも紅茶は冷めていく。美味しい間に飲んで上げるのがせめてもの手向け何だけど…。

「ねぇ楓？」
「んー？」
「紅茶に何か入れた？」
「何も入れてないですヨー？」
「…そう」

どうして目を逸らすのかしらねー？

とはいえ、本人が何も入れてないと言うのだからこれ以上の追求は無駄でしょう。
カップに手を伸ばす。楓が逸らしていた視線を私のカップへと向けた。
匂いは…変わらない。そんな初歩的なミスはしていない様子。
中身の紅茶に口をつけると、楓の目が輝いたように見えた。その輝きは…まるで悪戯が成功した子供のよう。

「んんっ！？」

なので、とっさにカップから口を離すと楓にキスをする。そのまま舌を使いながらゆっくりと、溢さないように紅茶を口の中へと移動させれば、楓は目を白黒させながらも受け入れた。
口を離すと、月明かりに銀色の糸が二人を繋いだ。

「…いきなりですね」
「あら、きちんとした方がよかった？」

そのまま見詰め合って沈黙する。やがて、赤い顔の楓がこくりと頷いたのを確認してから、抱きしめるとキスをする。今度はさっきよりも長く、ゆっくりと。

「満足した？」
「はぃ…」

彼女からしてくるかすかな血の匂いに意識が惑わされそうになったので、ゆっくりと身体を離す。
それにしても…おかしいわね。
とろん、と蕩けた様な表情の楓を見つめながら一人首をかしげる。
薬が入ってると踏んだのだけれど、時間が経っても見た感じに変

化は出ない。後考えられることがあるとしたら吸血鬼限定の薬だけど…そんなものがあるって言うのは聞いた事は無い。元から薬が入っていないという可能性は断じて考えていない！

「ねぇ、楓？」
「んー…？」
「紅茶に何入れたの？」

逃げないように片手で抱きしめながら聞くと、何処か夢現だった楓の眼に光が戻ってきた。

「それは言えないですね！」
「へぇ、入れた事は否定しないのね？」
「あ…」

悪戯がばれた子供の様な顔をした楓に優しく微笑みかけると、彼女もまた全力で誤魔化すかの様な笑顔をした。
すかさず放たれる黄金の右腕。すなわちアッパー。
しかし彼女は素早く私の拘束から逃れると、人とは思えない速度で後ろに倒れこんで回避した。
リビングの中に何かが頭をぶつけた鈍い音と腰を痛めたかの様な嫌な音が響く。

「っー！っー！」

声にならない様子で腰を抑えながら地面を転げまわる楓。痛いのはぶつけた頭か…それとも腰か…。
そんな彼女を冷めた視線で見下ろしていると、ふと違和感に気付いた。
よく見れば、彼女の頭の上には黄金色の何かふさふさとした物が

生えている様に見える。
やがて楓も自身の身体に起こった違和感に気付いたのか、ぴたりと動きを止めると頭と腰に手をやっている。
これは…どう見ても耳よね？ソレも狐の。いや、狐と犬の違いとか良くわかんないけれど。

「かえ…で？ソレ…？」
「そんな…」
「戻し方は？」
「そんなものあったらエウナさんに生やせないじゃないですか！」

叫んだ拍子にまた腰が痛くなったのか、びったんばったんと暴れているが今のを聞いて助ける気にはならないわね。
…とはいえ、そのふさふさの耳には興味が沸いて来る。でも素直に助けるのは何だか嫌だ。
そこでふと、私の頭に妙案が閃いた。

「ほわ！？」

私は素早く楓の視界の外へと消えると、その身体を後ろから捕まえて持ち上げて、ソファへと向かう。

「…コレはどういうことですか？」
「まぁまぁ」
「んー…」

私の膝の上で不満そうにしている楓を宥めながら片手で頭を撫でると、彼女は気持ちよさそうに声を漏らした。

「…じゃないです！どうしてボクを乗っけてるんですか！」

「まぁいいじゃない！」
「よーくーなーいー！」

はーなーせー！と騒いでいる楓を抑えながらも頭を撫でる。

「ところであなた、怪我でもしてるの？」
「んー？してないですよ？」
「…そう」

彼女から発せられる血の匂いに思わず食指が動きそうになるが、何とか我慢する。

「食べたいんですか？」
「…コレでも吸血鬼だからね」
「いいですよ？」

彼女のうなじから覗く白い首はとても美味しそうで…。

「…いえ、やめとくわ」
「ふむふむ」

流されそうになる理性を何とか抑える。コレでも好きなものは最後に食べるタイプなの。

「エウナさんエウナさん」
「んー…？」
「月が綺麗ですね」
「ええ、本当にね」

そのまましばらく、彼女の冷たさや柔らかさを感じていると急に

眠気が襲ってきた。

「エウナさん？眠いんですか？」

楓に返事をしようとするも意識は段々と闇に塗りつぶされていく。

「おやすみなさい、せめて幸せな夢を…」

楓からした声を最後に私の意識は途切れた。

狐って本当にお稲荷さん好きなんでしょうか（後書き）

はい、とりあえず1話です

だらだらとやっていきますが、最後までお付き合い頂けたら感無量です

今度こそ完結させるさ！

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

大切な場所（前書き）

第2話です
ちなみに3話目からはそんなに早く書けない！

人物表
エウナ
吸血鬼　ヘタレの称号を獲得するのは主人公の特権ですよね！？

楓
巫女さん　話をややこしくすることに定評のあるヒロイン的立ち位置な人

ミツキ
クラゲです　少し変でもクラゲです　女の子になれるけどクラゲです

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　恋人は女の子　本人も女の子

大切な場所

「エウナさんは別の世界に行ってみたいとか思ったことありますか？」

「何？ついに成仏したくなったの？」

「いえいえ、ここまで来たらそう簡単に成仏しないですよー。あ、ソレ取ってください」

「ソレってドレよ。私は現状のままで満足かしらね…何よその顔、文句あるの？」

□　□　□　□

庭に面している大きな一枚窓から月明かりが差し込む部屋の中に、私がページをめくる音だけが静かに響く。幸い、起きたときにはすでに楓はいなかったから、この静かな時間を精一杯満喫することにしましょう。

そう決めると『不思議の国のアリス』のページをまた一枚とめくる。

それにしてもこの本、ギャグなのかジョークなのかよくわからない言い回しが多い気がする。…何か楽しみ方でもあるのかしらね？

とはいえ、今日は満月。些細なことは気にせずに海の様に広く谷の様に深い心持で気にしないことにしましょう。

そう決めてからテーブルの上にセットされていた紅茶を飲んで一息入れていると、窓から差し込む月明かりが昼間の如く明るくなり、ガラスの砕ける音が辺りに響き渡った。そして視界の端からこちら目掛けて突っ込んで来た黒く大きな影。

そのままそいつは、速度を落とすこともなく私を殴り飛ばしてきた。

とっさの判断で不完全ながら受身だけは取ろうと身体を捻らせると、私がぶつかった食器棚から食器が落ちて割れる音が何処か遠くから聞こえてくる。

肋骨が数本折れたのか少し呼吸が苦しい中、突然の突っ込んでくるや否や殴り飛ばしてきた素敵な来訪者のことを観察する。

警戒する様にこちらを見ているそいつは、同じく図太い図体に付いた太い手足、そして爪に尻尾に牙に翼と、何処かで見たことあるような形。

というより、どう見ても竜なんだけど…家の修理費は誰が払うのかしらね？

私が竜を一体売るといくらになるのか考えていると、そのでかい図体の後ろから今にも火を噴きそうな細いヘビみたいな竜が見えた。

それはもう、口から少し漏れるくらいに発射数秒前。

どうやら窓ガラスを壊したのはあっちみたいね…。とはいえ、さほど広くは無い家の中、さらに後ろにあるのは台所に倒れた食器棚。

アレの威力はわからないけれど、ぶち込まれたらそうそう避ける物でもないでしょう。

ということで全速力で前へと走り、強行突破を狙うことにする。

私はでかい竜がなぎ払う様にして振った爪をかがんで避けると、すれ違い様に回転を加えた裏拳を叩き込む。

鈍い手ごたえの中、庭のほうを見れば、竜の真上から奇襲を掛けた楓がこちらに撃たれるはずだった炎弾で迎撃されているのが見える。

私はそのまま速度は落とさずに庭先まで走りこむと、吹き飛んでいる楓を捕まえながらその場から飛び去った。

□　□　□　□

遠く眼下に街の明かりが見える頃、もう大丈夫でしょうと結論付けると飛ぶ速度を落とす。変なのに絡まれた上に、飛ぶのは苦手だから余計に疲れた…。

「…大丈夫？」
「とっさに防ぎましたけど、骨が数本やられました。上に目でもあるんですかね？アレ」
「そんな奇妙な生物には見えなかったけれど…というより骨が折れてるなら、そんなに力入れないほうがいいんじゃない？」
「エウナさんへの愛のぱわーで傷も治る治るー」
「…」

お姫様抱っこの格好になっている楓聞くと、彼女は嬉しそうに狐耳をぴくぴくと動かしながら血の香りをする身体を押し付けてきた。そして、傷が痛むのか少しだけ顔をしかめた。

傷が治るどころか深くなってる気がするのだけれど…もしも彼女が抱きつくのをやめると、こちらの手間が余計に掛かることになるので何も言わないことにする。

「夜風は…寒いですね」
「ええ、そうね」

生ぬるい風が私のドレスと楓の赤いコートを軽く揺らし、もうすぐ熱気の終わりを知らせてくる。

「ところで、これからどうする？」
「ん、んー…とりあえずほとぼりが冷めるまで街外れの森にでも行きましょうか」
「そうねー」

そう決めるとだらだらと方向を修正する。
何故襲われたのかも判らず逃げる日々。惨めね…。

「愛の逃避行ですね」
「…」

いっそ落として全てなかったことにしてしまおうか？
その考えを実行に移そうか真剣に悩んでいると、私の真横をついさっき見たことあるような炎弾が通過していった。
後ろを見ると、これまたどこかで見たような大きいのと細いのが追ってきており、竜の影から銀色の髪がちらりと見えた。

「ちょっと！まだ追ってくるの！？」
「わお、意外としつこい人なんですね」
「あんた魔法使いでしょ？何とかしなさいよ！」
「無理ですよー…向こうは本職の魔術師なんですから…」
「ん…？」

楓の言葉に少しだけ疑問が出来たが、びゅんびゅんと後ろから飛んでくる弾に意識を持ってかれて消え去った。

「エウナさんこそ何か出来ないんですか！真後ろから直撃コース２発！」
「地に足付かないと安定した暮らしは遅れないのよ！」
「幸せ家族計画ですね！フェイント１発進路そのまま！」
「私は子供は嫌いよ！」
「嫌よ嫌よも好きのうちですか！エウナさんが望むなら私…！３発下に回避！」
「突き落とすわよ！」

二人とも何を言っているかもわからない中、避けたと思った炎弾の1つが私の真上で爆発した。

「しまっ…」

抵抗する間もなく、私たちは爆発に巻き込まれ落ちていく。

□　□　□　□

目を覚ますと方足に激痛が走った。見ると変な方向に曲がっており、どう見ても折れてる。

とりあえずコレでは歩けないので、折れてる足を両腕で持ち力と気合を込める。

「っ！」

とりあえずまっすぐに戻した足がくっつくまで動きようが無いので辺りを見渡すと、どうやら森の中に落ちたらしい。どうやら気を失った時間は長くない様子。

高さの割に傷が浅いのは木々がクッションにでもなったのか。

そこでやけに静かなことに気付き、慌てて楓の姿を探すが見える範囲にはいない。

まだ鈍痛がする足で辺りを探すと、そこには地面に倒れている楓が居た。

「楓！？」

「エウナさん…？えへへ…ちょっと…歩けそうに…ないです」

浅い呼吸を繰り返しながらも微笑む楓の手は変な方向に曲がっており、胸に刺さった枝が赤黒いコートの中で巫女服を赤く染めているのが見える。
とにかく夜の森は拙い。安全なところに行かないと何が出るかわかったものじゃない。

「エウナさん…近くに教会があるので…そこまで運んで行って…くれませんか？」
「ええ…」

なるべく衝撃を与えないようにしながら、彼女が指し示す方向へと歩いていくと、古ぼけた教会が見えた。
扉を開けると古ぼけた机やイスは端のほうに積まれており、教壇らしき物と大きな十字架が見える。
それにしても…私が教会に逃げ込む日が来るとは…ね。

「付いたわよ」

ちょうど中央辺りに楓を下ろすと、彼女は閉じている目を開けて微笑んだ。

「枝…抜いてくれます？」
「…いいの？」
「そっちのほうが…治りが遅くなるじゃないですか…」
「…」

彼女の言うとおりにずぶずぶと枝を抜くと、そこから赤黒い血が溢れ出てくる。

「ありがとう…ございます…」

彼女がそう言った時、教会内に微かな風が吹いた。扉は閉まっておりここで風が吹くはずは無いのに。

「コレは…？」

「ばれた…見たいですね…ミツ…キ…！」

楓がそう言うと、ふよふよと何処からかクラゲが飛んできた。クラゲは2、3ほど触手を動かして楓の身体を触った後、ゆっくりと上へと飛んでいった。

「まったく…」

楓はクラゲの方も見ずにゆっくりと立ち上がるとペンダントを振って短刀にし、呟いた。

「世知辛い世の中です」

突如ドアが吹き飛んで炎弾が迫ってくるが、炎弾は私たちに当たる前に見えない壁の様な物にぶつかり爆発した。

そして私はその爆風から突っ込んできた大きな影を殴り飛ばす。後ろでは炎弾が何度も爆発する音が響く中、追撃を入れるために駆け出す。

竜が繰り出してきた尻尾を片手で受け止めながら、その腹に拳を叩きこむ。尻尾を受け止めた骨がミシリ、と鳴る音と何かを砕く手ごたえ。

「エウナ…さん…！」

楓の声に反応して後ろへと下がるが、炎弾はすぐ近くまで迫って

きており爆発した。何とか直撃は逃れるも吹き飛ばされる。
すぐさま近づいてきた竜の腕を受け取めると、そのままお互いに動けなくなった。
とはいえ…馬鹿力を負傷した腕で受け止め続けるのは…結構辛いわね。
頼みの綱である楓の方では未だに炎弾が止んでおらず、見るからにふらふらとし始めて今にも倒れそうな様子。
すると突如弾は止み、ドアから銀色の髪が走り込んできた。
見た目はワンピースを着た少女といった所だけれど、手に杖を持って銀色の髪をなびかせているその顔は何処かで見たことあるような…。

「くっ…！」

少し気を抜いた瞬間に目の前の竜の爪が迫ってきたので力を入れ直す。
銀色の少女は楓まで一直線に走りぬくと、振り下ろされる短刀を下から杖で弾いてそのまま叩き付けた。

「楓！」

カランカランと弾かれた短刀が鳴る中、私の横目では細い竜がこちらへと炎を吐こうとしている様子が見える。
しかし、どうせ貰うなら相打ちまで持っていこうと思った瞬間、目の前の竜がゆっくりと崩れ落ちるのが見えた。
その後ろからは刀を突き刺している水色の髪の少女が見える。

『ロック…我が名の下に命ずる』

巨体に潰れそうになっている間、小さく呟くような声が聞こえて

きたような気がしたかと思うと、細い竜は結界の中で自爆していた。
そして、倒れていた楓は銀色の少女に馬乗りになってその細い首を絞めており、このままだと確実に殺すでしょう。

「楓！ダメ！」

私は叫ぶと倒れこんでくる巨体をどけて彼女へと駆け寄り、その冷たい身体を抱きしめる。

「もう大丈夫だから…だから帰って来なさい…」

荒い呼吸を繰り返している彼女を抱きしめて何度か囁くと、呼吸が少しずつ穏やかになって崩れ落ちる様にして眠りについた。

「まだ生きてる？」

楓をゆっくりと寝かせてから、動かない少女へと問いかける。
少女は銀色の長い髪に薄い藍色のワンピースを着ていて、こうしてみると探せばいそうな不思議な子にしか見えない。

「…殺さないんですね」
「その話は追々するとして…今は火を付けましょうか」

どうやら生きていることを確認すると立ち上がる。

「…寒いでしょう？」

□　□　□　□

ぱちぱちと廃材が燃える音が響く。火はミツキが付けた。決して摩擦で起そうとか花火で付けようとかの挑戦はしていない。
そしてミツキは火をつけた後またクラゲの姿になると、ふよふよとどこかに飛んでいった。

「…それで、どうして生かしたんですか？」

しばらくの間、燃えている焚き火を見つめていると少女が言った。

「まるで生きてることが不満みたいな言い方ね」
「もしも晩御飯になるのが理由なら、生きてるのは嫌ですから」
「ふーん…」

そういう捉え方もあるのか。というより、そういう捉え方が出来る様な経験をしたことあるのね、この子。

「まぁ、食べるつもりは無いわよ。生かしたのはただ答えて欲しい事があるから」
「答えたら別世界までの片道切符の発行ですか？」
「それは答え次第ね」

すると、彼女はくすくすと笑った。

「いいですねー。
私が答えれることで良ければ答えましょう」
「そう、それじゃ早速…何で私たちを襲ったの？」
「…」
「…」

私がそう聞くと、彼女は何処か上の方を見たりして落ち着かなくなった。

「…えーと」

「どうかした？」

ものすごく微妙な空気が流れる中、焚き火のぱちぱちとした音だけが響く。

「えーと…ですね…その…」

視線を合わせようとせずにちらちらとこちらを見てどうも忙しない。その様子はまるで怒られそうな子供の様。

「何よ、怒らないから言ってみなさい」

「その…あの家が大切な人の家でして…それで…勝手に住まれてて少し頭に血が上ったと言いますか…その…ごめんなさい」

そしておどおどと上目遣いでこちらを見てくる。

…つまり、そういうことね。

私がゆらりと立ち上がると、何を思ったのか彼女はビクッと体を震わせた。

しかしそのまま楓の元まで行き、ゆっくりとその体を持ち上げる。

「ねぇ楓？」

「…」

眠った振りを続ける楓に優しく語り掛ける。

「あそこ見つけたのあなただったわよね…知ってたの？」

「…」
「何も答えないって事は勝手に解釈していいってことよね…？」
「…シ、シラナイヨ」
「本当に？」
「…ホ、ホントダヨ」
「…」
「…」

ゆっくりと楓の足を焚き火に近づける。

「熱！熱いです！燃えちゃう！こげちゃいます！」
「知ってたの？」
「ダメ！ミディアムになっちゃいます！」
「答えて欲しいなー？」
「答えます！答えますから！」

楓を降ろすと、ばたばたと靴を脱いで素足になった。

「…怒らない？」
「怒る…でも言わないともっと怒る」
「…し、知ってました」
「そう…」

私は静かに呟いて彼女の体を抱えると、そのまま投げ飛ばす。

「知ってたのなら最初から言いなさいよ！」
「あーれー」

ゆっくりと地面に落ちてからわざとらしくぴくぴくと動く楓を尻目に、少女へと向き合う。

「知らないこととはいえ、悪い事したわね」
「…怒らないんですか？」
「結果として誰も死んでないんだし、別にいいんじゃない？」
私がそういって笑うと、彼女は少しだけ悲しそうな顔をした。
「…お人好しなんですね」
「ええ、昔言われた…わ？」
『エウナさんはお人好しですねー…』
突然誰かの声が聞こえたかと思うと、軽い頭痛に襲われ思わず頭を抑える。
誰…だっけ？
「どうかしましたか？」
私の目の前で銀髪の少女が首をかしげている。
「いえ…ねぇ、私たちって何処か出会ったことある？」
「会ったこと…ですか？」
んー、と考えている彼女を見ている間も頭痛は収まらない。
「たぶん無いと思いますよ？」
「…そう」
それじゃ、あの声は…何？
「エウナさん…」

声がする方を見ると楓が真剣そうな顔をしている。

「…ボクがこっそり混ぜたクマさんパンツ、履いたならちゃんと見せてくれないとダメじゃないですか！」

夜の教会に打撃音が響き渡った。

「…」

「あ、あのー…？」

「…何？」

「ひっ！」

彼女を横目で見ると、怯える小動物みたいな顔をされて少しへこんだ。

「も、もしよろしければ…家に来ませんか？」

「…いいの？」

「はい、私的にはあの家にさえ居て貰わなければ構いませんから…それに」

彼女はそこで切ると床で沈黙している楓のほうを見つめる。

「聞きたい事も…ありますから…」

その時の彼女は、何故だかとても幻想的に見える。

…そういえば、名前なんて言うのかしらね？

□　□　□　□

「ねぇ楓？」
「んー？」
「私たちの他に誰か一緒に暮らしてなかった？」
「んー…」

引越しのための荷造りから顔を少しだけ顔を上げて楓の方を見ると、彼女は少しだけ目を伏せた気がしたけど、すぐにいつもの笑顔に戻った。

「きっと勘違いですよ」
「…そう」

その後、二人とも会話もなく黙々と荷造りをする中で、彼女が目を伏せた時に見せた表情が少しだけ気になった。

大切な場所（後書き）

バトル回っぽいのだよ！

関係ないですが後書きに書くことが思いつかない！

ということで少しでも楽しんでいただけたら幸いです

くるくる回ってすってんてん（前書き）

小さい猫がにゃーにゃー鳴いてる夢を見た。
片手で持ち上げながら撫でると猫パンチしたり目を細めたりしてとても可愛かった。
目を覚ますとそこには片手じゃ持てないほどまん丸太った毛玉がいた。

毛玉「餌まだ？」

人物表
エウナ
吸血鬼　金髪ロング　ドレス　記憶力皆無

楓
魔法使い　長い黒髪を後ろで束ねる　赤いコートの巫女さん　第1話で名前を間違えられました

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　銀髪ロング　わんぴーす　恋人は女の子　本人も女の子

ミツキ
クラゲ　ミズクラゲ　そういえば詳細設定一番不明ですよね

くるくる回ってすってんてん

「そういえばあなたって喋れないの？」
（ふるふる）
「ふーん、喋れないわけじゃないんだ」
（…こくん）
「…」
（…）
「…喋りたくないならソレでもいいけど、色々と不便じゃない？」
（ふるふる）
「まぁ、あなたがそれでいいならいいけど…というより、あなたと話してると独り言みたいね」
（…）
「そんな困ったような顔しないで。ほら、乾杯しましょう」

カチン。

□　□　□　□

雲の間から差し込む月明かりが照らす草原を、二人の少女がくるくると回っている。片方は赤色、もう片方は水色の少女たちは優雅に近づいたり離れたりを繰り返しており、まるで二人でダンスを踊っているよう。

しかし少女たちの手には、長さこそ違えどそれぞれ刃の付いた獲物があり、そうしてみると優雅な踊りも殺伐としてくるわね。巫女服を着た方の子は動きの中に打撃も織り交ぜているから、余計に。

そんな光景を肴にしながら一人ワインを飲んでいると、軽い衝撃と共にやわっこいものがが背中に襲い掛かってきた。

そしてその衝撃の元凶は離れるどころか、前へと腕を回して来て離れる気がないことを無言で伝えてくる。

「…何してるの？」

「んー、抱き心地が良いかどうか気になったもので…意外と暖かいんですね」

衝撃でずれた位置をお面を直しながら、サラサラと肩に掛かって来る銀髪へと問いかけてみるも、当然ながら返事は私の頭の後ろから来た。髪が返事したら怖いけど。

「で、どう？」

「ルカさんの方が良いですねー」

「…」

誰よ、それ。

私が未知なる誰かに負けたことについて考えている間も、アリスは私の背中から離れずに抱きついたままだった。それにしても軽いわね。

「あなたちゃんと食べてるの？」

「…」

「…もしもし？」

「ん？んー…？ちゃんと食べてますよ？」

…今寝てなかった？

とはいえ、きちんと食べてるのに子供みたいな体にしかならなかったのね。

「む、なにやら失礼な事考えてません？」

「気のせいよ。そういえば仕事は終わったの？」

このまま追求されると苦しくなりそうなので、視線を髪から戦ってる楓たちの方へと向けると話題を振る。い、今楓と目が合ったような…。

「まだですけど、後は待つだけですからねー」

「へぇ、随分と雑なのね」

「最近の生態調査なんてそんなものですよ。探知魔法使って待つだけー」

「ふうん…」

頭の上にぐりぐりと押し付けられるあごを感じながらワインを注ごうとすると、突然横から伸びた手がボトルを取り去っていった。

「手酌は出世できませんよ」

「…何に出世するのよ」

「んー…魔王ですかね？」

「それなら出世できなくて良いわね。あなたもどう？」

「私はいいです。お酒呑めないので」

「そう…」

とくとくと目の前で告がれていくワインに気を使いながら問いかけてみるも、返ってきたのはつれない返事。いい加減一人で呑むのも寂しくなってきたのだけれど、しょうがない。

再びグラスに満たされたワインは赤黒い色をしており、まるで血のよう。そういえばパンは肉らしいけど、ワインは水か血かどっちだっけ？

ぼーっとどうでも良いことを考えていると、楓が短刀を弾かれ、戦いが決した様子が見えた。雲の切れ間から差し込む月明かりを受

け、銀色に輝いた短刀がくるくると回って飛んでいく。

「何者なんでしょうね？」

その様子を眺めていたら頭の上から声がした。

「…どっちが？」

「えーと…」

視線の先で、今度は2メートルほどはあるムキムキな石像が本人たちの代わりに戦っている。ただし、片方の像は下半身しかないしもう片方は上半身しかないので、その戦いはとてもシュール。というか知らない人が見たら黙って目を逸らす光景。

「ク、クラゲさんの方です」

「ああ、あっち」

下半身側の少女…名前なんだっけ？は謎の石像対決が始まるや否や、少女の姿をやめて普段のクラゲへと戻っていた。

「そういえばアレって何なのかしらね…楓の使い魔じゃないの？」

気が付いたら居たような気がするし。

「使い魔じゃなさそうですが…それよりもエウナさん知らなかったんですか！？」

「知らないわね…そんなに変なの？アレ」

見れば下半身が己の機動力を生かして上半身の後ろを取り、執拗に蹴りを入れている。上半身は何とか腕を回して対抗しようとする

も、悲しいことに足がないから移動すらも上手くできていない。どう見ても勝負にはならない光景なのだけど…何で上と下で2つに分けたのかしらね？
しかし下半身側も蹴りを入れるたびに軽く飛び跳ねて居るのは衝撃が強いのか、それとも痛いのか…どちらにしても意味不明な戦いであることに変わりは無いでしょうけど。

「…あなたの竜も同じ様なものじゃない」
「あの子達と一緒にしないでくださいよ！」

余りにも見てられないので空を眺めながら呟くと、悲しいことに聞こえたのか、アリスがぽこぽこと頭を叩いてくる。別に痛くは無いけれど、衝撃でお面がずれるずれる、ワインが零れる零れる。

「わかった、わかったから叩くのをやめなさい。投げるわよ？」
「魔法にも出来ること出来ないことがあるんです」

頭上からの襲撃も止むと、地へと散っていった儚きワインたちの補給をしながらアリスが言った。

「そうなの？」
「はい、それぞれちゃんと制約があってその制約の範囲内の事しか出来ません。簡単に言うと、水辺の近くで火を使うのはかなり難しいです。
クラゲさんみたいに自由に姿かたちを変えたり出来るというのは…見たことも聞いたことも無いですね」
「つまり？」
「禁術、もしくは古代魔術ってことです」
「…」

…あのクラゲってかなりすごかったのね。というかアレはクラゲなのか人なのか

「…魔法って便利そうに聞こえるけど、意外と不便なのね」

「まぁ…何でも出切るわけじゃないですが選択肢が増えるのは良いことですよ。こういう仕事の時とか、焚き火するときとかも便利ですし。

要は使い方次第ですよ使い方」

背後例の如く後ろにへばりつく魔術師はそう結論付けると、また私の頭の上にあごを乗せて全てをゆだねる体勢。少し熱気の残る夜の上、後ろに体温上昇要因がいるのでたまに吹くそよ風が心地よい。

ふと、先ほどの戦いの続きを見れば上半身が体ごと腕を回転させて空へと飛び去り、下半身はその脚力でジャンプを繰り返し白熱した空中戦を繰り広げていた。

「・・・アレは魔法なの？」

「・・・どうなんでしょうね」

雲の間から覗く星空に舞う、片方は上半身だけ、もう片方は下半身だけの2つの筋肉。飛び散る石片、絶え間なく続く岩と岩がぶつかる音。華々しく両腕を回して天高く上っていく上半身の姿は、何処か輝いているようにも見える。そのまま墜落して地獄にまで落ちろ。

「そういえばアリス？私のドレスの洗濯のことなんだけど・・・」

「そろそろ休憩も止めにして働きに行かないと！」

アリスはわざとらしくそう言うと、私の話を最期まで聞かずに走り去っていった。

・・・逃げたわね。

□　□　□　□

「えーうーなーさーんー」

ようかいみこがあらわれた。

「つーかーれーたー」

ようかいみこのだきつき、わたしはつかまってしまった。

「つーかーれーたーのー！」

「・・・」

楓は私の腿の上で同じ言葉を連呼している。むしろ憑かれたのは私の方なんだけど。

それにしても、一体私に何を求めてここに来てるのかしらね？生憎と疲れを癒す方法は全く知らないのだけれど。

「ワイン飲む？」

「ちゅー？」

うん、全て無かったことにしようそうしよう。

そう結論付けると片手で彼女のほっぺを伸ばして遊ぶ。おおー、まるで餅みたい。

「いひゃい、いひゃいです」

そうしてしばらくの感触を堪能していると、やがて捕まっていた手を話して抵抗し始めたので渋々手を離す。

「むー、伸びてないですか？」
「よく伸びる良い子に育ちなさい」
「慎ましい淑女に私はなりたいです」
「それは・・・難しそうね」
「何で何でー！」

寝転がったままびったんばったんと暴れだす楓。そういうとこを直さない限り淑女はありえないでしょうね。

「そういえばあのクラゲは？」
「ミツキですか？あの子なら飛んでった石像を探すとかで何処か行きましたよ」
「・・・アレって探さないといけないものなの？」
「後始末はしっかりするように言われてるらしいです」
「・・・そう」

ホント、変なところで律儀なクラゲね。

「そういえばアリスさんはまだお仕事？」
「あー・・・アリスね・・・」

そこで切るとアリスが去っていった森のほうをチラリと見る。

「アリスならほとぼりが冷めるまで森の中で大人しくしてるんじゃない？」
「それはそれは・・・世知辛い世の中ですね」

「ええ、ホントにね」

ワインの染みは取り辛いし、この服どうしようかな。

そうこうしてる間に眠くなってきたのか、楓はうとうとと目を閉じ始めた。

「眠いの？」

「んぅ・・・」

眠たそうにしている彼女の頭を撫でれば、黄金色の耳がぴくぴくと動いて少し面白い。

しばらく月と雲と星空景色を肴にワインを飲んでいると、下から微かな呟きが聞こえてきた。

「森の中で・・・綺麗な人を・・・見たんですよ・・・」

目を向けると寝ぼけているのか、楓は誰かに向かって話しかけるように言っている。

「金髪の・・・綺麗な人でした・・・」

「そう」

私はぽつりぽつりと呟かれる言葉に相槌を打ちながら、一人空を見上げる。

「いつか村を出たら・・・色々見て回るの楽しみですね・・・」

聞きなれない名前に反応して彼女の方を見ると、目じりから水滴が流れ落ちるのが見える。

その何かを指先で軽く拭うと、突然楓は目を覚ました。

「・・・？」
「良い夢は見れた？」
「氷華・・・ちゃん？」

ふふ、まだ寝ぼけてるのね？この子は。

「あ・・・」
「んー？どうかした？」
「え、えへへー・・・」

私がにっこりと微笑みかけると、楓も引き攣った笑顔で応えた。

「ねぇ楓？」
「な、何ですか？エウナさん」
「だーれと間違えたのかしらー？」
「なな、何のことでしょう？」

目が泳いでるわよ？
どうやらシラを切る様子なので涙を拭った手を反転、全力で楓の頬を突付く。・・・おお、これは意外と癖になりそうな感触。

「さ、刺さっちゃいます！刺さってますって！」

そのままつんつんぷにぷにとしていると、本格的に楓が暴れ始め、私たちの間で静かな戦いが始まった。
でも噛み付かれて指先の危機を感じたので数秒後には終戦した。
・・・何でこうなったんだっけ？

「ねーねー、エウナさん」

「ん・・・？」

こうなる経緯を思い出そうとするにも、思い出せるのは楓のもち肌のみ。・・・今度機会があったらまた狙ってみよう。

「目覚めのちゅーは？」
「地面としたい？」
「ぶーぶー」

天使の如き微笑で返すも徐々に膨れていく楓の頬。・・・はぁ、しょうがないわね。
私は一つため息を付くと周りに人影が無いか見渡し、そっと彼女へと顔を近づけた。

□　□　□　□

暗い森の木の陰で、その一部始終を見つめている少女がいた。
少女は長い銀色の髪に藍色のワンピースを着ており、木の陰でぶつぶつと何かをいっている姿はとても怪しく見える。

「パ、パル・・・いえコレは拙いですね・・・それにしても妬まし・・・」

とても、怪しく見える。

「ダメです私！山田たいちょーも言ってたじゃないですか！」

アリスは自身を鼓舞するようにして一人呟く。ちなみに、とても

怪しく見える彼女だが、幸い周りに人はいない。
実際に彼女の目の前では黒い帽子にマスク、そしてコートという怪しさ大爆発の男がいた。周りに人はいないが、別にいても彼女の幻想なのでかまうことは無いだろう。

『いいかい？アリス君、一度でもバカップルを経験したものは、他のバカップルを妬んではいけないよ？』

静かに諭すように変態は言う。
しかしソレもつかの間、変態の横から黒髪美人の女性が現れて状況は一変する。

『山田様、どうかなさいましたか？』
『おお山口君！実はアリス君に人間性の何たるかを説いているところでね』
『まぁ、さすが山田様です』
『ハッハッハそうでもないよ』

少女の目の前で展開されるのろけ、持つものと持たざるものとの差が今ここに明確に現れる。

「バカップル爆発しろ！」

ついにアリスの堪忍袋の尾も切れ、幻想相手に石を投げつける始末。しかし効いたのか、幻想の中のバカップルは何処かへと消えていった。

「私だって・・・私だって・・・」

一人呟くアリスの肩を叩くものがあった。

アリスがそちらを見ると、そこに居たのは宙に浮くミズクラゲ。

「あなたも・・・なんですか？」

悲しそうに触手を振るクラゲを見た瞬間、二人？は意気投合し、クラゲの持っていた酒瓶で乾杯となった。

暗い森の中、２つのグラスが寂しくカチンと鳴る。

くるくる回ってすってんてん（後書き）

お久しぶりです
いきなり3話目から読み始めて初めましての人はいないと思いますが、初めましての人は初めまして

前話から2，3週間くらい空きましたね
それほど空くと閲覧数も良い感じに過疎るのでチェックも疎かになります
まぁ自虐ネタはこの辺にすることにしましょうか

さてさて、だれてめぇ見たいな名前の人が割と出てきますが・・・
まぁ他作品に出た子ということで気にしないでください
たまに出てきますが別に知らなくても問題は無いと思います

次話のネタはもう考えてありますから・・・早ければ1週間には出るでしょう
といいつつ、1ヶ月になる可能性も無きにしも非ずなのでお待ちいただける方はだらだらお待ちください
一応月1更新目標ですから！

ではでは、お読みいただきありがとうございます
少しでも楽しんでいただけたなら幸いです

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（前書き）

本日のゲストはかの有名な戦う道から、２０年間変わらない完成された戦術を持つ軍人さんが来てくれましたー
わーわーぱちぱち

では、早速一言どうぞ
「くにへかえるんだな、おまえにもかぞくがいるだろう」

大変ありがたいお言葉でしたね

人物表
エウナ
吸血鬼　することないのでお昼は基本寝てます
楓
魔法使い　よく寝てますよねこの子

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　規則正しい生活は送ってません

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？

徐々に明るくなっていく窓の外ではチコチコと鳥の鳴く声が響く中、一人寝返りを打つ。寝返りを打つたびに体が柔らかいベットへと沈み込む。

眠れない・・・ベットってこんなに大きかったっけ？

こう、何だか手が寂しく感じられ、何度も寝返りを打ってしまう。

そういえば、楓はもう寝たのかな？

ふと疑問が浮かんだのでベットから立ち上がる。

『そんな・・・夜這いだなんて・・・エウナさんの大胆な・・・』

ドアの目の前で誰かの声と一緒に軽い頭痛がした気がするけど、気のせいということにして処理する。今朝だし夜じゃないし。

それにコレは楓が寝てるのかどうかを確認するだけで、別に寂しさに駆られての行動じゃない。うん、そうね。それにもしもあの子が寂しがってたら大変じゃない。あら、それじゃしょうがないし、どうしてもというなら添い寝でも・・・。

ぐるぐると思考を回転させながら抜き足差し足で廊下を歩くと、いつの間にか楓の部屋の前まで辿り着いた。

さて・・・次の一手はとても重要ね。

まぁドアを開けたらそこには楓が居たとして、アレ？エウナさんどうかしたんですか？と言われたとしましょう。

その問いにどう答えるかで、私の運命が決まるといっても過言ではないわね。

正直に寝てるかどうか気になったと言ったところで、意外と鈍いあの子はぺかーっと笑ってそのままはいさようならとなるに違いない。

それだけは断じて避けたいところ。いえ、別に寝てるかどうかを確認するだけなのだから別にいいのだけれど・・・。

「アレ？エウナさんまだ起きてたんですか？」

「っ！」

心臓が止まったかと思った。見ればそこには抱き枕を抱えて眠たそうにしているアリスがいた。

「え、ええ、そろそろ寝るところよ」

「そうですかー。私ももう寝ますし、おやすみなさいですね」

「おやすみなさい、良い夢を」

彼女が自室へと戻っていく様を微笑みながら見送る。

「ほどほどにしてくださいね？」

アリスが部屋に入る直前、彼女は全てがわかっているかのような笑顔を残していった。

その言葉で少しばかり引き攣った微笑みを固定しながら1分カウントし、そっとアリスの部屋の中へと耳を済ませる。

中では少しの間ごそごそとしていたが、やがてベットへと入ったのかソレも静かになった。

アリスの登場で思い出したけれど、今は明け方。

こうしている間にも、刻一刻と私がここに居ることが不自然な時間へとなっていってしまう。

ここは覚悟を決めて出たとこ勝負！大丈夫、何とかなるさ、今までだってそうだっだろう？

突如心の中で出てきた誰かにありがとうと告げると、特殊部隊顔負けの音の立たなさでドアを開いた。

楓の部屋は、よくわからない機具や変な色をした液体の入ったカップであふれていた。・・・私たち部屋貰ったの同時期よね?まぁ、ソレはいいでしょう。

どうやらあまりにも音を立てなさ過ぎたので当の本人は気付いてない様子。ちょうどいい、急に出てきて驚かせて上げましょう。

段々と明るくなっていく部屋で一人微笑む。気分は悪戯を実行する直前の子供。経験がないからなんともいえないけど。

四つんばいになりながらそろりそろりとベットへと近づくと、突然楓の前へと顔を出す。

彼女は、とても安らかな顔をしてすやすやと眠っていた。

そのままの格好で数分間、沈黙が部屋を支配する。認めたくない現実、安らかな楓の顔、間抜けな私。・・・今の、誰かに見られてたら死のう。

しかし、眠っていたならしょうがないわね。そう結論付けると次の行動を考える。

手は楓の頬をぷにぷにと突付くのに忙しく、自然と私の頬も緩む。

さてどうしよう。眠っていたのならしょうがない、次はどう動くべきか。それにしてもやわっこいわね。

しばらくの間つまんだり突付いたりすることに夢中になっていると、ふと彼女が寝返りを打ったので、可能な限りの速度で静かに壁際に張り付いて事無きを得た。

・・・何をしてるんだ私は。こんなことをするために来た訳じゃないでしょう!・・・ところで私は何をしに来たんだっけ?

楓は寝ていたわけだから・・・んー、それにしても何食べたらこんなに柔らかくなるのかしらね?

軽い眠気が残る頭でぼーっと頬の柔らかさについて考えていると、楓がうなされ始めた。

突如、私の脳内に電流が走る。

楓がうなされているのだから、コレは添い寝をして宥めてあげないといけないわね。

別に寝れないからこの機会にあわよくば抱き枕を手に入れよう、とかそういうわけじゃなく私は全てこの子のタメを思って・・・。

などと脳内で呟きながらも、静かに素早くベットの中へと入る。毛布の中は楓の体温でほどよく暖まっており、それだけで魅惑の魔の手が伸びてくる。当然、そのまま落ちてしまうのはもったいな・・・彼女のためにならないので眠っている彼女を抱きしめて、頭を片手で撫で撫していると、微かに香る血の匂いがさらに私を幻惑する。

大丈夫大丈夫・・・後はこの子が目覚めるまでに目覚めて自室に戻ればこの事は誰にもわからない。

そのうちに魔の手の侵略が抗いがたい状態まで達し、私は意識は溶けるように無くなった。

□　□　□　□

何だか覚えのある匂いで目を覚ますと、目の前で楓が照れたように笑っていた。

「・・・おはようございます」

「・・・？おはよう」

さてさて？何で彼女がここに？と疑問を抱き、辺りを見渡せばそこは何やらよくわからない機具やカップが乱雑と置かれている部屋の中だった。

その瞬間に蘇ってくる今朝の記憶。襲い掛かってくる私の恥行。思わず頭を抱えたくなるが、私の意志に反して両手はやわっこい温もりを抱きしめていて離れようとしない。

私の脳内は数パターンの言い訳を思考錯誤するも、コレといったすばらしいものは未だ出てこない。

そうしてる間に楓は甘える様にして私の胸へと顔を押し付けてくる。

一瞬の間に脳内がゴーサインで埋め尽くされそうになるも、理性を総動員して撃滅し、現状を打破する一手を考える。

「エウナさんエウナさん」
「・・・ん？」
「おはようのちゅー？」
「・・・」
「んっ・・・」
「じゃ、じゃあ私は起きるから」

楓と触れ合うだけのキスをしてからそそくさと戦線離脱しようとすると、小さい抵抗があることに気付いた。

不思議に思ってそちらを見るとちっちゃい手が私の服を掴んでいた。

「行っちゃうんですか・・・？」

呟く様な声が聞こえてきて、私の動きは金縛りにあった様に固まった。

頭の中でこの状況が続く事に対する今後のリスクと、今目の前にある幸せを天秤に掛ける。

「ぎゅー？」

天秤はゴキッと音を立てて今のほうへと折れ、そのまま奈落の底へと落ちていった。

「・・・しょ、しょうがないわね」

「にゃははー」

再び元の温もりへと戻ると、楓は嬉しそうに擦り寄って抱きついてくる。・・・ま、まぁ、しばらくこのままでも良いかな？うん、しょうがないしょうがない。

自然と頬が緩んでいく中、理性をフル稼働させながら彼女を抱きしめた。

今回が初めてだと、どうしていえるんだい？（後書き）

Q．次話はバトル回だって聞いたんだけど？
A．バト・・・ル？

見事に不定期投稿ですね

あ、あらすじ変えてみました
なんというグダグダ
だがタグは変えない
あらすじなんてなかったんや！

ぶっちゃけるとバトル回の前の小話を書いてたら1話出来ました
なんというグダグダ
まぁいいんですけどね

ということで、少しでも糖分を感じて頂けたら幸いです

旅に行くには準備が大切です（前書き）

～エースコンバット5～
仲間A「隊長は落ちないさ」
私「あー！あああああ！」
チュドーン
「＜リトライ

人物表
メリーさん
幽霊　話によっては結婚したりしなかったり
叶（カナエ）　夢（ユメ）
メイドさん　昔のヒロインなのに影が薄い哀しみを背負いました
ルカ
魔法使い　前作の主人公　前は魔法率皆無でお送りしました

旅に行くには準備が大切です

「エウナさんエウナさん」
「んー？」

私が『和菓子百戦の歴史』という意味不明なシリーズの本から顔を上げると、そこには嬉しそうにお札を突きつけている楓の姿があった。お札には『あくりょうたいさん』と下手な字で書いてある。

「・・・何それ」
「魔物退治のお札を作ってみたのです！」
「そう」

えっへんと無い胸を張っている巫女を見なかったことにすると、また読書を再開する。

「ちゃんと見てくださいよ！」
「五月蝿いわね、何よ」
「こーやって魔力を込めるとですねー」

楓が呟いた瞬間、バチっと音が鳴りお札は楓の手から離れた。そして地面へと落ちると黒く炭化する。
その様子を無表情のままで見つめる楓。

「少し、出ますね」
「・・・」

彼女はそう告げると部屋から出て行った。私はその姿に何も言えずにただ見送るだけ。

「むむ？本体（オリジナル）ったら他人にお茶入れさせて自分は何処かに行っちゃったんですか？」

聞きなれた声のした方を見ると、メイド服を着た楓が紅茶を入れながらニコニコと笑っている。

『エウナさまは、ユメが絶対に守ってあげますね！』

誰かの声と共に、ジャリっと鈍い痛みが頭を襲う。

「・・・今まで出来たことが出来なくなるってどういう気持ちなんでしょうね？」

ポツリこぼれた疑問はその頭痛のせいなのか・・・それとも彼女の姿が楓と瓜二つだからなのか・・・。

「さぁ、ボクには出来ることしか出来ないからわからないですね」

「・・・そう」

「何てったってボクには以前が無いですから！」

紅茶がこぽこぽと湯気を立てている紅茶を私の前へと差し出しながら、彼女はそう笑った。しかし、彼女は少しだけ表情を曇らせると言葉を続ける。

「ですが・・・エウナさんが悩んでいるなら相談に乗りますよ？」

「・・・それは」

「安心してください、ボクに話したことは本体は知ることが出来ま

せん。生まれた瞬間は共有していても、数秒もすればボク達は共有できない別人なんですから」

心配そうにして私を覗き込んでくる顔は間違いなく楓なのに、けれども何処か違う。違うことが、わかってしまう。

「怖いのよ」

「怖い・・・ですか？」

結局、私はまだ暖かい紅茶を見つめながらポツリと呟いてしまう。・・・私は、誰かに話したかったのかしらね？本人ではないとしても、そこに居るのは楓と変わらないのに？

「ねぇ、突然襲ってくる幻聴と頭痛は何？私は何時からあなたと一緒に暮らし始めたの？あなたは・・・何時から人じゃなくなったの？」

疑問に答えは出ないままも流れ出た言葉は続かれる。その問いに、彼女が答えれるかどうかなんてわからないのに。

「ある時から記憶がぷつりと無くなってる・・・何か、私は何か大切なことを忘れてるような気がして・・・それを思い出すと今の生活が無くなるような気がして・・・」

彼女は黙って言葉を聞き、そして私の頭を優しく抱きしめた。

「残念ながら、本体の意思がわからない以上、ボクがその問いに答えることは出来ません」

じっと彼女の体温を感じていると、少し気持ちが和らぐ。

「ですが、失った物は戻らなくとも魔法で封じられている記憶を取り戻す方法はあります」

彼女は私が落ち着いたのを確認してから離れると、月明かりが差し込んでくる窓を開けると優しく微笑んだ。

「己を知り敵を知れば百戦危うからず、ですよエウナさん」

それは、私の疑問に対する一つの答え。

「どうして・・・そこまで?」

あなたはあの子とは違うのに、どうして?

「例え数分前に生まれ、数秒後には消えるとしても・・・」

私を安心させるためか、彼女は微笑を崩さない。

「ボク達はエウナさんが笑っていられることだけを願ってますし、そのためなら何でもします。・・・だから、そんな辛そうな顔をしないで」

あなたは、何も悪くないんですから。

最期の言葉が聞こえたとき、彼女は何処にも居なかった。床に落ちているのは、人の形をして燃え尽きた一枚の紙だけ。・・・どうしてあなたはそう勝手なのよ。

「あれ?楓さんが居たと思ったんですけど、気のせいでしたか?」

どのくらいその紙を見つめていたのだろうか、ふと後ろからアリスの声がした。どうも紅茶が冷めていることから結構な時間を過ごしたみたいね。

「エウナさん？泣いてるんですか？」

「・・・気のせいよ。それよりアリス、良ければで良いんだけど・・・」

「んー？はい、何ですか？」

少しだけ彼女の居たほうを見てから、アリスへと向き合う。

「魔法、教えてくれない？」

□　□　□　□

シトシトと雨が降っている中、山奥にひっそりと建っている屋敷へと数人の人影が入っていく。全員銃を持っており一人は片手に大きなトランクを持っている、黒く素早く、さらに音も無く静かに動く様はまるでゴキ・・・特殊な訓練を積んでいる様に見える。

ところどころ朽ちて穴の開いている玄関ホールで一人が合図を出すと、ゴキブ・・・彼らは1階と2階で分かれた。ちなみに徒歩であり飛んではいない。

明らかに屋敷よりも長い2階廊下をカサカサと静かに動く不法侵入者3人。時折立ち止まっては手に持った計器を見ているところから、目的地の場所はわかっている様だ。

そして、永遠に続くのかと思われた長い廊下もついに終わりを向かえ、彼らは一つの扉の前で立ち止まった。中で物音がしないことを確認すると、廊下に1人を残して中へと入っていく。開けたら閉

める常識は今のところ通用されない様子。
ぼろい他の部屋とは違い、高級そうな調度品がある部屋の中、ベットには一人の女性が横たわっていた。白いドレスに身を包んだ女性は長い金色の髪をベット全体に広げ、静かに目を閉じている姿は人形にも見える。
その女性を近づいて確認すると、へんた・・・一人の男が手に持っているトランクを開けた。中に入っているのは、ホワイトアッシュの杭とハンマー。
二人がそれぞれ杭とハンマーを手にした時、突然部屋の扉が閉まり部屋の外から銃声が聞こえてきた。彼らは反射的に近くにあった銃を構えて扉へと向けた。そのまま数十秒、不気味な沈黙が屋敷の中を支配する。しかしお互いに目配せをした瞬間、その沈黙は破られた。
突如ドアと一緒に何かが吹き飛んできて一人の男を押し倒した。押し倒された男が驚いて、あさっての方向へとトリガーが引かれる中、開きっぱなしとなったドアから小さな少女が飛び出し、まだ立っていた男の首へと手を掛けた。そのまま勢いをつけて首をへし折る。
頭が変な方向へと曲がった男が倒れる中、少女は未だ仲間の死体の下から抜け出せずにいる男をちらりと見ると、死体ごとその体を踏み潰した。勢いよく出た血飛沫が少女の服に赤い斑点を作った。
少女は自身が赤く染まるのも気にせず、メイド服から携帯電話を取り出すと何処かへと電話を掛ける。

「メリーさまー？」

電話を片手に持っているメイド服を着た少女は小さい子供ほどの大きさで、腰まである長い白髪を後ろで纏めている。少女がうんうんと頷くたびに、後ろの髪がさらさらと揺れた。
やがて、ドアから一人の女性が現れると少女は電話を懐へと閉ま

い、とてとてと女性の下へと駆け寄った。部屋へと入ってきた女性は銀髪のポニーテールを揺らしながら駆け寄ってきた女性を抱きしめる。

「わお・・・これまた派手にしましたね、ユメさん」
「・・・ダメでしたか？」
「いえいえ！そんなことは無いですよー」

女性・・・メリーは駆け寄るや否や不安そうに見上げてくるユメを撫でると笑顔で応える。気持ちよさそうに目を細めるユメ。

「とはいえ、ちょっと汚れすぎですよ！」
「ごめんなさい・・・」

メーと指を出すとユメはしょんぼりと肩を落とした。ちょっとで済むのか・・・ソレは誰にもわからない。

「まぁ、私も準備がありますからその間に着替えてきてくださいな」
「うん！」

ユメは元気よく返事をすると、とててててーと部屋から出ていった。その後姿を微笑みながら見ていたメリーは、ベットで横たわっている女性へと目を向けると少し表情を暗くした。

「そういえばルカはー？」
「んー・・・電話にも出ないですしどうしてるんでしょうね？」
「そっかー・・・」

新しいメイド服へと着替えてきたユメが何気なさを装って聞くと、メリーは困ったような顔をして答えた。

「まぁ、あの人なら平気でしょー。ではでは行きましょうか」

メリーは何処と無くがっかりした様子のユメに苦笑しながら隣の部屋の扉を開くと、どういうわけか食堂が見えた。

しかし二人とも特に気にした様子は無く、先にメリーが、その後で眠っている女性を抱えたユメが続くようにして入っていく。

「うらぐちー？」
「はい、裏口ー」

二人がのんびりと食堂から台所へと歩いていると、突然入ってきた扉が開き、数人の兵士が銃を撃ちながら現れた。ところで全員同じ格好なのだが、見分けは付くのだろうか。

「・・・意外と準備万端ですね」
「どうするのです？」
「んー、先に行っててくれますか？」
「大丈夫なのですか？」
「だいじょーぶなのです」

その間も銃声は絶え間なく続いているのに、その弾は触手の様なもので防がれて彼女達に届くことは無い。

心配そうに何度も振り返るユメがとことこと台所へと入って扉を閉めると、扉越しに兵士達の悲鳴が聞こえてくる。しかし、数分も経つと悲鳴も聞こえなくなり、メリーが静かに扉を開けて入ってきた。

「お待たせしましたー、ではでは行きましょうか？」
「うん！」

メリーが勝手口の扉を開けて屋敷の外へと出ると、外は白い霧で数歩先も見えない状況になっていた。
二人はその霧の中をはぐれないように手を繋ぎながら歩いていくと、古ぼけた車庫へとたどり着く。
メリーは慎重に中の気配を探ると、静かに扉を開けた。車庫の中も霧が広がっていたが、二人が中へと入るとぱちんと指の鳴る音がしてゆっくりと霧が開けていった。
中には黒いのワゴン車が一台あり、床は水浸しとなっている。

「アレ？意外と早かったじゃない？」
「お待たせしました。もう出れます？」
「それはメリーさんに任せるよ」

洗浄用のホースから水を出して床を濡らしながら、中に居た赤いコートを着ている少女が笑って言った。

「はいなー、ではでは出来る限り早く出ましょうか・・・あ、そういえば霧はどのくらいまであります？」
「んー・・・街の外辺りまでかな？」
「そうですか・・・」

メリーは少しだけ表情を暗くしたが、すぐに笑顔になると車庫のシャッターを開ける。

「ルカ！こっち掛けないでよ！」
「わかってるわよ・・・後きちんと『さん』をつけなさいちびっ子、グリグリするぞ」
「やー！」

「よろしい、ならばグリグリだ」

ルカは逃げようとするユメを捕まえると、頭をグリグリする。

「眠り姫は一番後ろ？」

「そうですね・・・トランクに詰めるのはアレですしそこがいいかとー」

「だ、そうだちびっ子」

「いひゃいひゃい！わかったから離すの！」

ユメは開放されると、一発蹴りを入れてルカを悶絶させてから眠り姫と呼んだ女性を車に乗せる。その作業の中、車の後部座席からリアカーにいつもは被せられていなかった青いビニールシートが被せられているのが見えた。

不思議に思って近づくと、何かを積んでいるのかビニールシートが少し膨らんでいる。ユメの中にむくむくと湧き上がる好奇心。

しかしその好奇心もシートに手を掛けたところで待ったが掛かった。

「よーし、そこまで！そこから先はちびっ子は見ちゃダメ」

哀れにもユメは後ろから抱きかかえられると車へと連行される。

「子ども扱いしないのー！」

「はいはい、夜寝れなくなるから見ちゃダメよ」

「ルカ臭い！血生臭い！」

「・・・そ、それは聞き捨てなら無いわね」

ルカはじたばたと暴れるユメと自身を抑えながらも車へと連行する。

「準備は出来ましたかー？」
「こっちは平気ー」
「ぶー・・・・」

運転席に座ってるメリーは膨れてるユメを見て微笑むと車を発進させた。

「ではでは行きましょうか・・・魔法使いを探しに」

旅に行くには準備が大切です（後書き）

ありそうな質問

Q. 何この話、別じゃないの？
A. 同時進行です

Q. 何で作品にするの？馬鹿なの？死ぬの？
A. 世界観は微妙に一緒ですので勘弁してください

説明になってない？聞こえんなー

本作品には他作品を読んでるとわかりそうでわからないようなネタがたまに出ます
別に問題は無いと思いますがご了承ください

また本作品には平然と骨が折れたり色々したりします
ご了承ください

甘くない？あらすじ詐欺？バカップルじゃない？ゴメンナサイ
次話は普通のいつものイチャイチャが入ると思います
というより、他の人の読んでると色々自重したほうがいいんじゃない？とか思うんですがどうなんでしょうね？
ひたすらバカップルしてる姿なんて見せられて楽しいものなんでしょうか・・・

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です（前書き）

誰が得する用語説明のコーナー
どんどんぱふぱふー♪ヾ（≧≦）ノシ
さぁ、第2回があるかどうかわからない誰が得する用語説明のコーナーがやってきました
第1回は『魔法使い』と『魔術師』の違いです
ちなみに本編には全く関係ないですから！

魔術師が魔法を専門にしている人のことで魔法使いは魔法が使える人のことです

数学で書くとこんな感じ
魔術師⊂魔法使い

コレでよくわからない人のために例を挙げると
魔術師＝大学教授
魔法使い＝生徒
だと思ってください
つまり魔法の専門家が魔術師なんですよ！

わかんなくても本編にはほぼ関係しないので気にしないでください

人物表
エウナ
きゅーけつき　昔にやったちゅーけつきというネタがネタじゃ無くなって来ました
楓

魔法使い　嬉しいと耳がひょこひょこ動きます　ちなみに正式に告白は一度もしてないです

アリス・イン・ワンダーランド
魔術師　お酒に弱い　とにかく弱い　寝起きも弱い　とにかく弱い

ミツキ
クラゲ　（´―｀）いいですよね、クラゲ

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です

私は今、人生最大の窮地に立たされている。
目の前にあるのは開かれている1冊の本、認めたくない現実。スタート時は笑顔だった私の顔は既に仮面を通り越して石像と化している。

「つまり誰がしても大体同じ様な結果になる科学と考えが違って、魔法は出来る人だけが出来ればいいという考えで動いてます。
もちろん、魔術師の中にも誰にでも使えるということを目指している人も居ますが・・・どちらにしても魔術師達の目的は一つ。アカッシックレコードを目指すことです」
「へ、へぇ・・・そうなの」

・・・アカシックレコードって何なのかしら。

「それでですねー・・・」

アリスはそう言うと本のページを1枚めくり、ある場所を指し示した。どうしようもないので視線を落とせば、私へと襲い掛かってくる意味不明の言葉の羅列。
それでから始まる言葉はほとんど理解が出来ない。中には辛うじてわかるものも少しあるけれど・・・それじゃわからないのと大して変わらないじゃない。
アリスから発せられる言葉は空中で分解され、私の耳に届き、脳へと留まることをせずに逆耳から飛び出して行く。
ここまで来ると、私の目の前に居る彼女は本当にいつも接していた彼女なのか疑問を覚えてしまう。

「ア、アリス・・・ちょっといい？」
「はい？どうかしましたか？」

にこにこと嬉しそうに何かの言葉を発していた正体不明（アリス）は私の顔を見つめてくる。
覚悟を・・・決めるときが来たようね。

「コレって・・・皆覚えてるものなの？」
「んーと・・・完全では無いですが、皆大体は覚えてるんじゃないでしょうか？」
「そ、そう・・・」

私は精一杯の精神力を使って感情（ほんね）が表情（たてまえ）に出ないように気をつける。

「大丈夫ですか？」

・・・どうやら少しだけ出てしまったらしく、心配そうにアリスが覗き込んでくる。
どうしても認めたくないけれど、認めなければ先に進めない。それはわかっているのだけれど、それを認めるにはどうしてもプライドが躊躇してしまう。

「・・・少し休憩にします？」
「ええ・・・そうしましょう。紅茶入れてくるわね」

そう告げるとそそくさと台所へと逃げて天を仰ぎながら逃れ続けていた事実に目を向ける。
私って・・・馬鹿だったのね・・・。
何時までも嘆いていてもしょうがないので、悲しみを背負ったま

ま適当に紅茶を入れて持ってくると、テーブルの上には現実が待っている。

『だれでもわかる！まほうがくのほん（こどもよう！）』

やたらと強調されたその本は挿絵も多く、さらに振り仮名も振っていて確かに子供用なんでしょうね・・・。私はわからなかったけれど。

「どうかしましたか？エウナさん」

「いえ、何でもないわ」

忌々しいその本を何時までも見ていると、彼女に悟られてしまうのでさらりと視線を逸らしてカップに紅茶を注ぐ。

ぽこぽこと湯気が立ち上ってくるソレは、既に香りだけでいつも飲んでいるものよりも劣っていることを主張してくる。

「・・・美味しくないですね」

「・・・ええ、ホントにね」

適当に入れた紅茶は見事な風味を醸し出し、私達の味覚に渋みだけを訴えてくる。つまり不味い。すごく不味い。ストレートで飲む気にならないくらいに不味い。

今度楓に紅茶の入れ方でも教えて貰おうかしら？

「ところでエウナさん？さっきの話、全くわかってないですよね？」

アリスがカップにミルクやら砂糖やらをぶち込んでいる様子を羨ましそうに見ていると、スプーンでくるくるとかき混ぜながらアリスが言った。

心臓が止まるかと思った。

「そ、そんなことは無いわよ？」
「そうですかー」

世界が止まったかの様な空気の中、アリスのスプーンだけはくるくると動き続ける。
私はその空気に耐え切れず、やけに乾く喉を不味い紅茶で喉を潤そうとして突然注ぎ込まれた熱に失敗していた。

「いいですか、エウナさん」

そんな私の様子を微笑んで見ていたアリスが諭すように言う。

「わからないならちゃんとわからない、と言ってくれないと困ります。まぁ、言わなくてもわかりますが・・・」
「・・・」
「ちゃんと言ってくれれば此方もきちんと対処しますから・・・ね？」

・・・まずその手間の掛かる子を見るような顔を止めなさい、話はそこからよ。
当然そんなことを言えるわけも無く、ただ黙って事態の沈静化を待つ。大体今回で本を変えるの3回目なのよ！？言えるわけ無いじゃない！

「ん、んー・・・あれ？ミツキさん、山狩りは終わったんですか？」

困ったように紅茶を飲むアリスをなるべく見ないようにしていると、頭に救世主（なにか）が乗っかってきた。

「・・・乗るのは良いけれどお面ずらさないでよ？」

私の上で応じるように揺れ動くミツキ。その動きは私に対する返答なのか、アリスに対する返答なのか、一体どっちなのかしらね？

「そうなんですかー、ではでは楓さんももう帰ってきますね」

何故かはわからないけれど、アリスはミツキの言うことがわかるらしい。

そして、魔法の勉強のことは楓には秘密にしておいて欲しい、という私の身勝手な願いを律儀にも守ろうとアリスはせっせと本を集め始めた。当然私も参加する。

「ただいま戻りましたー」

「お帰りなさい」

アリスが使った本を片付けに行っている間に、秋なのだからとか言うよくわからない理由で山狩りへと向かった楓が帰ってくる。

「見てみてエウナさん、たいりょー！」

嬉しそうに耳をぴくぴくと動かせながら、腰につけた籠を私の後ろから抱き付いてきて見せてくる楓。中には色鮮やかな良くわかんないキノコやら山菜らしきものやらがつまっている。正直よくわからないけれど・・・このキノコ大丈夫なのかしら・・・？。

「そう、それはよくやったわね」

「んー♪」

よくはわからないけれど、褒めて欲しそうに耳が動いていたので頭を撫でると、気持ちよさそうに目を閉じた。

「・・・ねぇ楓？何か捕まえた？」

さっきから籠の中に袋がぴくぴくと揺れて自己主張を繰り返してるのだけれど。

「んーとですね、ツチノコー！」
「そうなの、ツチノコなの」
「うむうむ！」

さっきと同じ様に撫でて撫でてーと楓の耳がぴくぴくと動くが今度は無視する。・・・記憶違いが無ければツチノコってアレよね？あのヘビみたいな。

「・・・逃がしてらっしゃい」
「美味しいですよ？」
「ダメよ」
「ぶー・・・」

そんなゲテモノ絶対に食べたくないので楓の言葉を一言で切り捨てると、彼女は不満そうにぶーぶー唸り始めた。

そうしてしばらくの間むーむーと唸っていたが、やがてツチノコが入っている袋を持つと目を輝かせた。

「じゃあちゅーしてくれたら逃がしてあげます！」
「よし渡しなさい、私が捨ててくるから」
「やー！」

その言葉が聞こえた瞬間に拳を振るうと、頭の上に居たミツキが驚いたように揺れた。願うは唯一つ、食べたくない。

しかし、不完全な体勢から放たれた拳は目標にたどり着くことなく空を切る。

「あら、逃げなければ一瞬で終わったのに・・・残念ね」
「エウナさんの拳に愛が篭っているなら正面から受け止めましょう！」
「哀なら十分に篭ってるから安心しなさい」
「文字にしないとわからない違いを言わないでください！」
「何言ってるかわかんないわね！」

拳に加えて蹴りを混ぜるも、彼女に当たる気配は無い。まぁ、当てる気もないのだから当然なのだけれど。もちろん、家具を壊さないように細心の注意を払うことは忘れない。

「わわっ！何してるんですか！」

途中でアリスが帰ってくるも気にせず、当たらない攻撃を加えながら楓を何も無い角へと追い詰めていく。

「さぁ、追い詰めたわよ？」
「エウナさん！ケンカは良くないです！」
「アリス・・・コレはしないといけないことなのよ」

あなたもツチノコなんてゲテモノ食べたくないでしょう？
必死に止めようとするアリスへと対応しながらも、視線は楓から外さない。

「ふふ・・・追い詰めた？冗談でしょう？」

追い詰められているにも関わらず楓は不敵な笑みを浮かべてそう

言うと、そのまま両手を精一杯此方へと向けてくる。

「さぁ！観念してボクにちゅーするのです！」

「・・・エウナさん、手伝います」

「・・・見えてる所には傷を残さないようにね」

「わかりました」

「ちょ、ちょっとまってください！二人掛りは無理ですって！」

夜も深まる家の中、楓の言葉が空しく響いた。

□　□　□　□

「ところでコレどうするの？」

悪も滅して一段落付いたところで、山狩りの成果をどうするかアリスへと聞くと、彼女はんーと宙を見上げた。私も釣られて上を見るけれども・・・天井しかないわね。

しばらくの間天井と勝負の付かないにらめっこしていると、ミツキが私の頭をぺしぺしと叩いて自己主張してくる。とりあえず頭に手をやって撫でるとふよふよとした感触が返ってきた。

「・・・ぬめぬめしてる」

「んー？」

「何でもないわ」

気のせい・・・であって欲しいけれど、ぺしぺしが強くなった気がする。

「お鍋にしましょうか！」
「鍋って・・・誰が作るの？」

自慢じゃないけれど私も楓も料理は全く出来ない。アリスも何かを温めたりするところは見たことあるけれど・・・出来てる物を温めるのを料理と呼ぶには少し辛いものがあるわね。

「安心してください！私が作るわけじゃないですから！」
「それじゃ誰が作るのよ」
「私に心当たりがありますから！その人のところに行きましょう」

こうして自信満々に胸を張ったアリスに率いられて夜の街へと繰り出すことに。悲しいことに、張っている胸は見事なまでの平らっぷりなのだけれど。

今がどのくらいの時間なのかはわからないけれど、夜中の街はとても静かで、私の背中からしている楓の寝息が微かに聞こえてくる。上を見上げれば半分に割れた月が光輝いているし、少し遠くを見れば建設途中となっている塔が見える。

私の視界の中で、ゆっくりと塔から誰かが落ちていくのが視える。その幻想を見た瞬間、ズキッとした痛みに襲われて頭を抑えてしまう。

「どうかしましたか？」

片手に籠を持っているアリスが不思議そうに覗き込んでくるけれども、返事をする余裕が出ない。

私の目の前で銀色の髪が月明かりに反射する。その綺麗な髪も、赤い汚れが付いて・・・。

微かな血の匂いが強くなった。

『・・・我が名の下に命ずる』

しかし、突然誰かの声がしたかと思うと、急に頭痛は治まった。

「お家に戻ります？」

「大丈夫よ・・・さぁ、行きましょう」

「・・・そうですか」

アリスに余計な心配を掛けないために笑いかけると、また夜の街を歩き始める。けれども私の足はすぐに止まる事になった。

悲しいけれど、先頭を歩くには道がわからないのよね・・・。

□　□　□　□

その後、とことことまるで鴨の子供の如くアリスの後ろを引っ付いて歩いていると、街外れの店へとたどり着いた。

アリス曰く、看板も出てないその店は知る人ぞ知る高級料亭だとか何とか。見た感じでは小さい明かりが漏れているけれど、正直やってるのかやってないのかすらわからないわね。

「・・・コレ、やってるの？」

「だいじょーぶです、少し人嫌いの人がやってるからこうなってるだけですから」

そう言うと、がらがらーと扉を開けて入っていくアリス。

その店へと入る前に、ちょうどいい茂みへとツチノコ入りの袋を放り投げておくことも忘れない。口は開けておいたし、よほど運が悪くなければ死ぬことも無いでしょう。

「いらっしゃい・・・あら、アリスじゃない。元気してた？」
「お久しぶりです。元気してました」

私が中へと入ると女将さんらしき人と知り合いらしく、和やかに会話をしている。一人蚊帳の外で切なく待つ私。

「最近来ないから気になってたのよ。そういえばルカは元気？」
「ルカさんは・・・そうですね、たぶん元気です」
「そ、それじゃ金が無くなったらいつでも戻って来いって言っておいて」
「はい、伝えておきますね」

今一瞬、少しだけ暗い表情が出たような気がするのだけれど・・・気のせいかしらね？後ルカって前に聞いたことあるような？
はてさて何時だっけ？と悩んでいる間にも話はぽんぽん進んでいって座敷へと案内された。
落ちついた感じの部屋の中心には木で出来た大きな机があって、私達はそれぞれ思い思いの場所へと座る。ずっと私の背中で眠っている楓はコートを剥いでから適当なところで落とす。

「ここはよく来るの？」
「はい、結構馴染みなんですよー」

女将さんの注いだお茶を飲みながら何が美味しいとかドレが美味しくないとかの話に花を咲かせていると、やがて料理がやってきた。
お刺身やらお酒やらよくわからないものやらが私の目の前に次々と運び込まれて行く。運ばれていくたびに説明が入るのだけれど、ふんふん、はぁ、へー、と聞いていることしか出来ない。とりあえず何かの食材の名前を言ってることだけは辛うじてわかった。

味は美味しいのも、そうでないのもあるけれど一応残さず食べる。
それにしても、この小皿の料理だけでいくらになるのかしらね・・・
。
お酒も入りゆらゆらと食事が進む中、メインとなるお鍋がやって
きた。
見た目は普通で野菜がぐつぐつと煮えている。でも中に肉類が入
っているような気がするのだけれど・・・まさかツチノコとか入れ
てないわよね？

「このお肉は？」
「はい、ソレはですね」

営業スマイルで返された肉の名前は知らなかったけれどの、逆に
知らないからこそ安心できる。味も普通に美味しかった。
楓のことだからこっそりと毒キノコとか混ぜているのかと思った
のだけれど・・・そんなことも無い様子？
そんな私の心境を知ってか否か、申し訳無さそうに言い始める女
将さん。

「キノコなのですが、全て毒キノコだったので勝手ながら処分させ
ていただきました」
「いえ、気にしないで」

私は何とか微笑を維持して女将さんへと返す。
混ぜてやがった！しかも全部！・・・通りでキノコが無いわけね。
というより全部って事は私達にソレを食べさせようとしてたって事
よね？・・・さてさて・・・どうしてくれようか。

「かえでさんずっとねてますねー」
「そうね・・・そろそろ起してもらえる？」

「はいー」

私がほのかに赤い顔のアリスに頼むと、彼女はのそのそと動いて楓を揺さぶった。

「・・・おはようのちゅーが無いと起きません！」
「ちゅー？」
「・・・」

頭が回ってないじゃない・・・。思わず頭を抱えるとアリスを楓から遠ざけ、料理についてきたカラシを集める。どける際にアリスがふわわーとか言っていたのだけれど・・・大丈夫なのしからね？色々と・・・。

目標確認、発射まで3秒。

静かに心の中で3秒カウントすると、何かのたまっている馬鹿へと爆弾を投下する。燃えるようなキスをあなたにプレゼント。

「んー・・・？んんんっー！？」

爆弾は見事に目標へと着弾し、目を白黒とさせた楓が飛び起きてきた。

「大丈夫？はい、お茶」
「ありはとうごはいます」

悶えるように耐えている彼女へとあつーいお茶を渡してあげる優しい私。

「っっっ！」

結果、楓は涙目になりながら部屋の外へと消えていった。たぶん、癒しの水を求めて。

その様子を冷めた目で見送っていると、視界の端でアリスがこっちに向けて口を開いているのが見えた。・・・何？

「あーん」
「・・・」

・・・何を求められているのかはわかるけれど、何で求められているのかがまるでわからない。さてさて・・・どう対処しようか。

「んー？」

私が対処法に悩んでいると、不思議そうな顔をしてからまた口を開けるアリス。

「あーん」
「・・・あーん」
「えへー」

何となく口元へと料理を運ぶと、ぱくりと食べてぺかーと笑う。そしてまた次をよこせとばかりに口を開ける。

することもないし、しばらくの間アリスへと食べ物の輸送作業を続ける。気分は雛鳥に餌を与える親鳥。

「・・・もういいの？」
「やー」

やがて、あーんも無くなったので聞いてみると、アリスはぺかーっと笑うと何故か私の頭をぺちんと叩いた。・・・誰か助けて。

衝撃でずれたお面を直している間にもアリスの奇行は続く。
彼女はのそのそと私の前まで動くと、ごろんと膝の上に頭を乗っけてきた。

「ねむー・・・」

一言呟くと目を閉じるアリス。私は助けを求めるべくクラゲの方を見ると、そいつは目が合うや否やふよふよと飛んで私の頭の上に収まって動かなくなった。

「ちょ、ちょっと！アリス！離れなさい！」
「んー？」
「んー、じゃないから！いいから離れなさい！」
「うー・・・！」

何とか引き剥がそうとするも、アリスは私の腰をホールドして離れようとしない。

「あったかー・・・」

コレは拙い！かなり拙い！とにかく剥がさないと・・・もしも楓に見られたりなんかしたら。

「あ・・・」

そこで私は気付いた。気付いてしまった。
ぎぎぎ、と音が鳴りそうなぎこちなさで襖の方を見る。
そこにはものすごい綺麗な笑顔を顔に貼り付けた楓が立っていた。
それはもう・・・あまりにも綺麗過ぎて人形に見えるくらい。
楓は笑顔はそのままでゆっくりと席へと着くと、黙々と食べ始め

た。

「あ、あの・・・コレは・・・アリスが・・・ね？」

たじたじになりながらも何とか現状を説明しようとがんばる私。

「いえいえ、いいんですよ？ボクのことはお気になさらず続けてください」

す、素敵な笑顔ですね、楓さん。それはもう・・・素敵過ぎて怖いほどに。

息が詰まるような沈黙が舞い降りた部屋の中に、アリスの寝息と鍋がぐつぐつと煮える音だけが響く。

この状況は・・・かなり拙い・・・！

如何にして現状をごまかし・・・もとい、打開策を考えるも移動が制限されている今、出来ることはほぼ皆無といって良い。

「あらエウナさん、お皿が空じゃないですかー。その状況じゃよそえないでしょうし、ボクがよそってあげますよ」

ニコニコと笑顔のままでそう言うと私の皿を持っていく楓。そして返されてきた中身は・・・スープだけ。

こ、これはどういうことなんでしょうか？楓さん？

針のむしろのような状況の中、救世主とも呼べる女将さんがデザートのプリンを持ってきた。プリンはクリームのついてる高級そうなの。

「仲が宜しいんですね」

・・・救世主かと思えた女将さんは私達の現状を見ると、一言爆

弾を落として去っていった。
パキッと何かが折れた音が楓のほうから聞こえてくるけれど、怖くてそちらのほうはとても見れない。
引き攣った笑顔を襖の外へと向けていると、食事も終わったのかかちゃかちゃとスプーンが鳴る音が聞こえてきた。
そちらのほうをちらりと横目で見ると、無表情の楓が顔にクリームが付くのも気にせず機械的にプリンを口に運んでいる。その瞳は虚ろで光は無く、正直に言うとかなり怖い。すごく怖い。
しかしその観察が功をなして打開策が閃いた。出来る限りの速度で脳内シミュレートをする。かなり難しいけれど・・・出来るとか出来ないとかじゃない！やるしかない！

「か、楓？」
「・・・はい、何でしょうか？」

私が話しかけるとすぐに笑顔へと戻る楓。ただし、瞳は虚ろで光は無い。
その顔を見た瞬間に心がくじけそうになったのだけれど、何とか勇気を振り絞って考えに考え抜いた作戦を実行に移すべく笑顔を作る。

「そ、その・・・ほっぺにクリームがついてるわよ？」
「・・・それはご丁寧にありがとうございます」
「よ、よければ私が取ってあげるからこっちにいらっしゃい」
「・・・はい？」

ゆっくりと首を傾ける楓。・・・耐えろ、耐えるんだ私！泣くんじゃない！泣いたら全てが終わるわよ！
全力で自身を鼓舞して笑顔を維持。
そのまま永遠とも思える時間が過ぎ、やがてゆっくりと楓が此方

へときて私の横に座る。

「・・・では、せっかくですからお願いしましょうか」

「え、ええ・・・任せて頂戴」

ここが正念場ね・・・。

覚悟を決めると、素早くクリームのついた楓の頬へとキスをする。

そしてそのまま優しく舐め取ると、口内に上品な甘い味が広がる。

「・・・」

「と、取れたわよ・・・？」

口を離して楓の顔色を伺おうとすると、突然視界が黒く塞がれたかと思うと、唇に柔らかいものが触れてすぐに離れた。

「か、楓・・・？」

何も見えない中、思わず名前を呼ぶも返事は無い。そして、私は何かに後ろから抱きつかれた。

「見ないでください」

とっさにそちらのほうを向こうとすると、楓の静止が掛かったので慌てて向くのを止める。視界の端で彼女の狐耳がぴくぴくと耳が動くのがちらりと見える。

「エウナさんはずるいですねー・・・」

何も出来ないので黙って抱きしめられていると、後ろから楓の声がした。

「・・・ずるいです」

呟くような声がすると、強く抱きしめられて静かになる。

こ、コレは許されたと判断していいのかしらね・・・すごい気になるのだけれど・・・失言は絶対に避けたい。

となければ大事なのは最初の言葉。

さてさて・・・なんて返したら言いのかしらね？

悩みながら窓のほうを見ると、整えられた庭が月明かりに照らされてるのが見える。

「・・・月が綺麗ね」

ぽつりと漏れたのは、変わらないいつものやり取り。

「・・・ホントですね」

返答が来た後、抱きつく力が少し優しくなったような気がした。

「ん・・・そんな・・・ダメですよー・・・」

「・・・」

下のほうでアリスの声がしたかと思うと、楓の手がゆっくりと私の首に掛かる。

「ま、待って楓！は、話を・・・」

「いいですよー？何でも言ってください」

そ、そこ首だから！そこ絞めたら声が出ないから！色々と出なくなっちゃうから！

「あれ?何も言わないんですか?遠慮しなくてもいいのに・・・」

ぎぎぎ、っと楓の力が入っていく。ちょ・・・それ以上は・・・まず・・・っ!

やがて骨の折れる音が聞こえてくるのと同時に視界が回り、私の意識は無くなった。

我が家では1年12ヶ月中11ヶ月はお鍋の季節です（後書き）

昨日は湯豆腐今日はおでん
めぐりめぐるお鍋の季節ヾ（≧≦▽≦≧）ノシ

あ、前話から1週間で出来てますが・・・次もそうなるとは限りません

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

旅に危険は付きものです（前書き）

おや？（＜●＞д＜●＞）の様子が・・・

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д（＜●＞д＜●＞）д＜●＞）

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д（＜●＞д＜●＞）д＜●＞）

（（＜●＞д＜●＞））

（＜●＞д＜●＞）の進化は止まった

いつもよりめっさ長いです

人物表

メリーさん

幽霊　特に意味も無いですが幽霊です　立場的な力関係ではたぶん一番強い

叶（カナエ）　夢（ユメ）

ちびっこメイドさん　メイドさんらしいことしてたのももう昔の話・・・

ルカ

魔法使い　恋人は女の子　別に男性に興味がないとかじゃないよ！

浮気性でもないよ！

※本作品は全話読み終えた後に、嫌な味が残るといいなーという目標の元に作られています

旅に危険は付きものです

周りが明る過ぎるせいかさほど綺麗に見えない星空の下、買い物袋をぶら下げて歩く。もう日が落ちると肌寒くて、秋の終わりを告げられている気がする。コートを着てなかったら少し辛いかも。

それでも月は綺麗ね・・・。

満月から少しだけ欠けている月は何処か愛嬌を感じる。完璧じゃない辺りとか。

そういえば、月が出ていると星空がよく見えないって聞いたことがあるのだけれど、本当かしらね?

「止まれ」

空を見上げながら町外れの宿へ向かってふらふらと歩いていると、聞きなれた声がしたので立ち止まる。

見ればそこには手に棒を持っている黒い制服を着た殿方二人。全く、今日も検問ご苦労様と言いたい。言わないけど。

「ここから先に何の用だ?」

「この先の宿に泊まっているものです」

「どうしてこの先の宿なんだ?」

「旅をしていまして、なるべく安いところを選んでます・・・通ってもよろしいでしょうか?」

「・・・荷物を確認してからだ」

もはや定番となった受け答えをすると、簡易式のテントへと連れてかれる。ここに連れてかれるのは今日で何度目だっけな?

「済みません、何度も確認して・・・」

一人が買い物袋をがさがさと開ける中、もう一人の男性が申し訳無さそうにお茶を出しながら言った。それにしても買い物袋しか確認しない辺り、かなり雑よね。

「お気になさらないでください。ですが・・・近頃は寒くなってきましたし、体調は崩さない様にしてくださいね？」

「い、いえ！自分は健康だけが取り得なので！」

本心はともかくとして、私がそういって笑いかけると、彼は少し赤い顔をしながら胸を張った。そのまま二人で笑いあう。

「今日は買出しですか？」

「はい、少しずつでも準備はしないといけませんので・・・あ、申し訳ございませんが、ビニール紐は解かないでいただけますか？」

「・・・だそうだ。ビニール紐なんて旅に使うんですね？」

「あると便利ですので」

もしもの時の止血とか・・・とは口には出さずに黙って微笑んでおく。触らぬ神に祟りなしね。近頃の神さんは触らなくてもあるらしいけど。

視線の端では買い物袋から出された小瓶やビニール、水なんかがテーブルの上に置かれている。あの様子ならもうすぐ確認は終わるでしょう。

「異常なしです。ご協力ありがとうございます」

「いえいえ、お勤めがんばってくださいね」

きっちりと戻された買い物袋を再びぶら下げると、彼にだけ見える様に小さく手を振ってからまた歩き出す。

「あ・・・少し待ってください！」
「・・・はい？」

数歩歩いたところで呼び止められたので振り返る。この時間帯、あまり長居はしたくないのだけれど・・・。

「その・・・和食と洋食ではどちらが好みでしょうか？」
「和食と洋食・・・ですか？」

鸚鵡返しに答えて時間を稼いでから、私の嗜好に何の意図があるのかと少しだけ考える。・・・素敵な差し入れでもしてくれるのかな？

「和食・・・ですね」
「そ、そうですか！その・・・美味しい和食の店があるんですが・・・もしよろしければ今度どうです・・・か？」

差し入れじゃなくて食事の誘いだった。少しだけ気が抜けるけれども、微笑は作ったままで答える。というより最後に自信なさげになっちゃいかんでしょう。

「それは素敵ですね。では何時にしましょう？」

その後、何処何処に待ち合わせという簡単なやり取りをしてから、再び宿に戻るべくテクテクと歩き始める。

さてさて・・・、

この事実をあの二人に言ったら何ていわれるかわかったものじゃないけれど・・・言わない訳にはいかないのが切ない・・・。

それにしてもここに来てから1週間か・・・そろそろ急ぎたいな

のだけれど・・・まぁ、なるようになるわね。

□　□　□　□

「どうやら魔術と科学で対立してるそうよ」
「それはまた在り来りな・・・どっちが優勢です？」
「言わずもがな、ね」
「・・・科学ですか」
「それにしても、代々的な魔女狩りって・・・何時の時代よ」
「ソレはソレはー、うかつに外を歩けないですねー」
「それでも行くの？」
「居るんでしょう？」

静かな車内にちびっ子の寝息が聞こえてくる中、ギルドの情報屋から掻っ攫った資料をがさがさと漁って目的の項目を探す。

「入ったのは・・・一昨日？それから先は中で探すしか無いわね。てか堂々と正面突破したみたいよ」
「・・・」
「・・・本当ですか？」
「・・・ホントに」

正規では無いとは言え、軍隊相手に、正面突破。

「まぁ・・・楓さんに色々教えた人らしいですからね」
「・・・ホントに？」
「・・・本当です」

アレの先生か・・・。もしかして私たちはむちゃくちゃな奴を追ってるんじゃないかと、今更ながら心配になって来た。

「何にしても！少なくとも居る場所はわかったんです！後は出たとこ勝負ですね！」

「ま、まぁ、他に手は無いからね」

乾いた笑いが響く中も車は進んでいく。

□　□　□　□

和服を着るとどうも落ち着かない。コートまで剥がれたのだから余計に。気のせいか、軽く頭痛もする。

「ど、どうかした？」

「・・・いえ、少し夜風が冷たく感じまして」

「そっか・・・それじゃ少し急ごうか」

心配そうに聞いて来た彼へと無難な微笑と答えを返すと、彼は少しだけ歩く速度を上げた。私を気遣っているらしく、ほんの少しだけの微妙な変化。

それにしても、公私で口調が変わるのは気付いているのか、いないのか・・・まぁどちらでもいいか。

食事の誘いをメリーさんに告げた時はさほどのリアクションも出なかった。意気揚々と面白がって付いてこようとするのだとばかり思っていたから拍子抜けしたくらい。・・・付いてこさせないけど。

けれども問題はその後、出かける寸前に起きた。

『せっかくのでーと何ですからおめかししないとダメじゃないですか！』
『コートは置いていってください』
『あなたはでーとに武器を持って行くんですか？』
『ルカさんって和服が似合うと思うんですよねー』

適当に身支度を済まそうとした私を、待ってましたとばかりにニコニコ顔で口出ししてくるメリーさん。なまじ言ってる事が正しいだけに逆らうことも出来ず、哀れにも私はメリーさんの着せ替え人形となった。一応、ハンドバックの中にお財布と水筒、そしてナイフを1本入れることだけは許してくれた。

・・・救いがあるとしたら、ちびっ子が寝てて気付かれなかったことね。

それにしても待ち合わせ場所へと着いた時、彼が少しぼーっとしたのが少し・・・いやかなり気になる。・・・そんなに変な格好なのかねぇ？

寒さのせいか、それとも他に理由でもあるのか、お互いに無言で夜の街をテクテクと歩いていると、やがて目的地らしいお店が見えた。

むちゃくちゃ高級でも無いけれど、むちゃくちゃ安いわけでもないという適度なお値段のお店と見た。

「ここだね」

ガラガラと扉を開けると、そのまま私を待ってくれる彼。意外と気が利くみたい？

「ありがとうございます」

譲られたので先に中へと入ると、女中さんらしき人に礼をされた

ので微笑みを返しておく。とりあえず笑う、色々あって鍛えられた表情筋はこんなときにも役に立つ。

既に話は通っているのか、彼が名前を言うと和室へと通された。中央にはテーブルがあって、座布団は向かい合うようにして2つ。窓からは庭の景色が見える。後は壷とか掛け軸とか云々。

座布団に座るとすぐに女中さんが来て飲み物を聞きに来た。

「お酒は平気？」

「はい、種類はお任せします」

「そ、そう・・・じゃ、コレを2本・・・」

「お食事の際、何かダメなものなどはございますか？」

「その・・・蛸は少し・・・」

「かしこまりました」

そう言って深くお辞儀をすると、静かに襖を閉めて行った。・・・メニューは完全にお任せなのかな？

「蛸、ダメなんだ？」

「蛸だけはダメでして・・・」

「へぇ・・・たこ焼きとかも？」

「はい・・・」

皆あんな気持ち悪いの良く食べれるわよね・・・。内臓とかどうなってるのよ、アレ。

その後、何が好きだとか何が美味しいとかの世間話をしていると女中さんが現れて冷酒を置いていったので、すすっとお酌をする。

「本日はお誘いいただきありがとうございます」

「そ、そんな・・・こちらこそ・・・それじゃ、乾杯」

「はい、乾杯」

そういって二人で笑い合うとお猪口を空にする。
さてさて・・・どうしようか。
トクトクトク・・・っとお酌をしながら、この先どうするかを考える。まさか世間話だけで帰る訳にも行かないし・・・。

「そういえば、お仕事の方はよろしいのですか？」
「うん、今日は休みなんだ」
「そうなんですか、お休みは大切ですね」
「あんまし取れないのが悩みなんだけどね」

彼はそういって笑うとぐいっとお酒を呑んだので、また注ぐ。あまり強くは無いほうなのか、顔が少し赤くなっている。

「・・・まだあの宿に泊まってるの？」
「はい、出来る限り出費は抑えたいものですから。何かよろしくない噂でもあるのですか？」
「うーん・・・」
「言い辛い事でしたら、無理に言わなくても結構ですよ」

聞いてみると何か言い辛そうにしたので、微笑みながらお酌をして身を引くことにする。ちょうど小鉢に入れられた料理も来た頃合。

「いや・・・そういうわけじゃないんだけど・・・ここだけの話、あそこはあまり良くない人たちが集まってるらしいんだ」

しばし沈黙のままで料理を口に運んでいると、何かを考えていたらしい彼が言い始めた。あ・・・これ意外と美味しい。

「良くない人たち・・・でしょうか？」

「そう、俺も深くは知らないんだけれど、何でもゲリラが隠れ家にしてるとか。ほら、あそこって郊外で安いし・・・」
「そうなんですか・・・ソレは怖いですね・・・」

魔術師（ゲリラ）・・・か。モノは言い様ね。

「だからあそこに泊まるのはあんましお勧めしない」

かなり酔いも廻ってきたのか、口調が砕けて舌の廻りが良くなってきた。

「ですが、そういう人たちを抑えるために寒い中、ああやってお仕事なさっているんでしょう？」
「うんまぁ・・・そうともいうね」
「では、いざというときは安心ですね」
「いや・・・まぁ・・・」

照れた様にしてお酒を呑むのですぐに注ぐ。潰す気は無いけれど、なるべくなら酔いは醒ませたくない。

「そ、そういえば旅をしてるんだっけ？」
「はい、コレまでにも色々なものを見てきました」

相手にばかり余りにも一方的に話させると違和感が起きるので、こちらのことも話す。嘘は5割ほどで。
私の話に彼がふんふんと聞き入っている暫らくの間にも、少しだけ焦り始めている内心とは違って穏やかとも言える時間が流れる。

「それじゃこの街にも観光目的で？」
「はい、それもありますが・・・少し、人を探していまして」

「人を？」
「赤色のコートを着た女性なんですが、もしかしたらご存じないでしょうか？」
「赤色のコートを着てる女性ねー・・・ちょっと待って」

やっと本題に入るも、彼はうーんと唸ったままで動かない。そして何かを思いついたかのようにして携帯を出すと、微かに震える手でボタンを押し始める。

「あの、気分がよろしくないなら無理はなさらなくても・・・」
「大丈夫・・・大丈夫・・・」

一応形だけでも心配した様子をいていると、彼は笑って電話先と話し始めた。
うん、うん、という返答をしながらこちらをちらりと見てくる辺り、どうやら状況は芳しく無い様子。
やがて話も終わると、彼は申し訳無さそうな顔をして私を見た。

「仲間内でもわからないって」
「そうでしたか・・・」
「ごめん・・・」
「いえいえ、探して頂いてありがとうございます」

軽くお辞儀をすると、お猪口を空ける。たまには呑まないと不自然になるし、呑まないと少しやってられない。

「あ・・・物知り爺さんなら知ってるかも」
「物知り・・・ですか？」

彼からの酌を受け取りながら鸚鵡返しに聞くと、赤い顔をしたま

ま誇らしげにいった。

「この街一番の物知りでね。知らないことは無いんじゃないかって言われてるから物知り爺さん」

「まぁ・・・ソレは・・・」

便利そうな人ね。

「立派な方なんですね」

「あの人なら何か知ってるかも・・・ちょっと待って、今何か書くもの探すから」

「ありがとうございます」

彼がごそごそと懐や部屋の周りを探し始めたので、ふと窓のほうを見ると見覚えのある顔が見えた。雪の様な白い肌に緋色の瞳、そして銀色の髪をポニーテールにしている彼女は、雰囲気が何処かアリスに似ている。だけどソレよりも何よりも、ここにアリスは居ないし居るはずがない。そして、そいつはメリーさんにそっくりだった。

メリーさんらしき誰かは私と目が合うと、ゆっくりと窓の下へとフェードアウト。窓からは揺れているポニーテールの先が見えるだけとなった。

「メリーさまメリーさま、ユメもユメもー」

「しーっ、ユメさん静かに・・・」

少し耳を澄ませば、ちびっ子の声まで聞こえてきた。うん・・・幻聴が聞こえるだなんて・・・私ったら・・・酔ってるのね・・・。

内から湧き上がるものを抑えるために、自然とお酒へと手が伸びる。

「書けた書けた・・・どうかした?」
「申し訳ございません・・・少し気分が悪くなりまして・・・」
「ああ、うん・・・無理はしないで?」
「はい・・・少し席を外しますね」

部屋から出る時に彼へと軽くお辞儀をしてから襖を閉める。完全に閉まりきったことを確認すると、静かに素早くダッシュ!
目指すはお手洗いだから別に嘘はついていない。到着と同時に水道の蛇口を全開にすれば下準備は完了。
目的は・・・ネズミの駆除?それにしても、捻れば水が出るってのは本当に便利。昔の人に伝えたいくらい。

「まぁ・・・純度は良くないけれど・・・」

流れていく水を眺めながら一人自重めいた哂いをこぼすと、指をぱちんと鳴らした。目立ちたくないので呪文は唱えない。
すると、水は何かに導かれるかのように宙へと浮くと、トイレの窓から飛んで行く。
その光景を確認してから蛇口を閉めると、部屋へと戻る。
私が戻ると彼は何処かそわそわしながらお酒を飲んでいたが、私に気付くと少しだけ身を乗り出した。

「だ、大丈夫?」
「はい、ご心配頂きありがとうございます」

ちらりと窓の外へと視線を送りながら座布団に座る。

「そうそう、物知り爺さん何だけどね・・・」
「はい」

ふんふん、ふむふむと彼の書いた地図を一緒に覗きながら頷いていると、顔の真横から視線を感じたので彼を見る。すると、すごい勢いで赤い顔を地図の方へと向ける。

「どうかなさいましたか？」
「な、何でもない！ソレでね・・・」
「・・・そうですか」

少し気になったけれど、何でもないと言うのだからそうなんでしょうね。再び、ふんふん、ふむふむと続きを聞く。

「お教え頂きありがとうございます」
「いやいや！こちらこそありがとう」
「・・・？」
「い、いや・・・何か良い情報が見つかると良いね」
「・・・そうですね」

そういえば外のネズミはどうしたのかな？と思って耳を済ませると、小さく『こうなれば合体攻撃です！行きますよユメさん』とか『へ？う、うん・・・』とか聞こえてきた。

・・・楽しそうで何よりで。そのまま一緒に逝けばいいのに。

「あの・・・平気？」
「・・・大丈夫です。そういえば、ネズミはお好きですか？」
「ネズミ？」
「はい、ネズミです」

くすりと笑うと、彼が外のネズミに気付かないようにと世間話を始める。

無理をしすぎたらしく、そこで私の意識は一旦切れる。

□　□　□　□

気が付くと、和服とメイド服の二人が夜の街を全力で駆けて行くのが見えた。・・・少しは隠れろ。

その背中に向かって視線で物体は殺せるか?を実践していたけれど、彼がお店から出てきたので止める。

そういえばここは何処だろうと振り向けば数時間前に見かけた料理屋。どうやら外に居るみたいね。

なにやら、素敵な思い出を共有しましたので・・・とか頭が沸いてるのじゃないか?と思われる発言が私の口から漏れた様な気がするけど気のせいでしょう。気のせいよね?・・・なんだか頭が痛い。

「ごめん、待たせたね」

「いえ、夜風は好きですので」

にっこりと微笑むと、夜の街を歩き始める。既に深夜とも言える時間帯の街はとても静か。

自然と私の口数も少なくなり、それに合わせたのか彼も静かになった。

静かな夜道ををのんびりと歩いていると、まるで何処か別の世界へと連れてこられたみたい。けれども、ここに紅白の魔法使いが出ることは無いでしょう。

検問所のあった辺りを通るけれど、さすがに深夜は労働時間外なのか誰もいない。ザルな警備ともいえるけれど・・・ここは形式だけで本命は別のところに居るんでしょうね。

やがて、会話も無いまま私たちが泊まっている宿へと着く。

長方形の箱を縦に４つ重ねたような見た目で、クレーム色の壁が薄闇にぼんやりと見える。宿というよりはただの四角い箱、というのが着いたときの私の感想。

けれども、正面くらいは外見も気にしているのかところどころ木が生えている。裏には駐車場があってそれ以外はほぼ林。本気で営業する気があったのか気になる立地ね。

「本日は送ってまで頂きありがとうございます」

「いやいや！何事も無くてよかった」

「では、道中お気をつけて。おやすみなさい」

「おやすみ」

簡単に別れを告げ、お辞儀をしてから中へと入る。

宿の中身も、１階こそ違えど２階以上は外見を見れば予想できる構造で、通路の両側には部屋が付いている。まぁ、１階も小さなロビーがあるだけで後は一緒なのだけれど。

トイレもお風呂も部屋付き。食事は自前、サービス皆無という素敵なお値段の宿。きっとここで殺人事件がおきても気に掛ける人は居ないでしょうね。

たぶん部屋の中も私たちと一緒で、玄関の正面には６畳ほどの広さで最低限の家具しかない和室、両脇にトイレと台所の構造。通路でＴ字が書けそう。

そしてここの一番の問題点だけれど、なんと階段が端にある１つしかない。おかげで一番遠い部屋に泊まると、景色もさほど変わらない長い一本道をただひたすら歩かせられる。何を考えてこんな形にしたんだろ・・・というより、非常事態にどうやって逃げろと言うんだろ？

そんなことを考えながらかつかつとコンクリむき出しの階段を都合４階分上る。私たちが泊まってるのは一番上の一番奥。つまり、一番逃げれない所。

「ただいま戻りました」

扉を開けた私を最初に出迎えてくれたのは、驚いた顔のままでこちらを見て固まっているちびっ子の姿。

「・・・？」

ああ、戻ってなかったか。

「ユメさんが驚くのも無理ないですよー。着替えさせた私も一瞬誰かわかんなくなりましたし」

「・・・それはどういう意味で言ってるわけ？」

どうやら何時の間にやら私は変装の名人になったらしい。怪盗にでも転職しようか？

部屋に入って寝巻きに着替えようとすると、どうやら電源が入った様子でユメが起動を始める。

「ちょっと！帯引っ張るのは止めなさい！」

「ルカって和服着ると別人みたいになるのですね！」

「よしちびっ子、今すぐさんを付けろ、さもなくばその頬を伸ばす」

「やー！・・・いひゃいいひゃい！」

伸ばしたり噛まれたりする激戦を片手でしながら、メリーさんに彼から貰ったメモを渡す。

「コレ、収穫、情報、情報」

「わかりましたけど・・・なんで片言なんですか？」

噛まれてる手が痛いんだよ！こんちきしょう！

「わかった・・・わかったからちびっ子、噛むのを止めなさい。どうどうどう・・・」

「むー！」

さて、噛まれた結果唾液でべとべとになった哀れな手はどうしようか？と思うも良い手は浮かばない。しょうがないから、なるべく片手だけで着物を脱ぎ始める。

「・・・脱いじゃうのですか？」

「何よ、悪い？」

「せっかくお嬢様みたいなの・・・いひゃいいひゃい！」

第2回戦が始まる。口は災いの元よ、ちびっ子。

「ど・・・どうどうどう」

「むー！」

第2回戦は5秒で終戦。コレ以上続けると私の指の本数がキリの悪い数になって、脳内にエマージェンシーコールが鳴り響いてしまう。人質を取るなんて卑怯だと思わない？

「ル、ルカさん・・・！」

「何？どうかした？」

「このメモ・・・全く意味がわかんないです！」

「・・・言ってなかったっけ？」

「言ってませんでした」

「そう・・・」

簡単にメリーさんにメモの説明をする。片手しか使えない都合上、手早く脱ぐことが出来ないから着物が肌蹴た姿のままで。肌蹴た姿のままで！

・・・私、何やってるんだろう？

「つまり、ここに行けば何かわかるとー？」

「わかるかも・・・ね」

「ひゃにひゃにー？」

ちびっ子が喋るたびに私の指に生暖かくてぬめぬめしたものが当たる。そりゃ私の指に噛み付いたままで銜えっぱなしだものね・・・。私の指の何が美味しいのか。最悪、そのままぷっちんとするのだけは止めて欲しい。

それにしても、半裸でちっちゃい子に指を舐められているこの現状。・・・ハハッ、あの子に見られたら殺されそう。

メリーさんがちびっ子にもわかるように噛み砕いて説明すると、ふんふんふむふむと頷きながら聞き入っている。あれ？コレ指抜いてもいいんじゃないかな？

「・・・っ！」

「どうかしましたか？」

「い、いや何でもない」

ゆっくりと抜こうとすると、思いっきり噛み付かれた。咄嗟に動きを止めると噛み付いたところを撫でるように小さい舌が這ってくる。何？何がしたいの！？何の意図があって私の指を銜えるわけ！？危なく指がぷっちんするところだったじゃない！

「・・・」

「ん・・・」

軽く第一関節を曲げてみると、上目遣いにこっちの方を見ながらちろちろと舐めてくる。・・・何この状況。
誰か助けて・・・本気で。

「メリーさん・・・ちびっ子に何か教えた？」
「ナ、ナンノコトデショウカー？」

さっきからニヤニヤとしている奴に聞いて見ると、そいつはワザとらしくひゅーひゅーと吹けない口笛の真似をしながら窓の外の方を見た。
・・・なんだか突っ込んだら負けな気がしたので、ちびっ子と目を合わせる。

「むー？」
「いい、ユメ？ずっとこのままでも居られないし、もう離してくれない？」
「むー・・・」
「ね？良い子だから」

頭を撫でながら誠心誠意を込めて言うと、渋々といった感じで私の手を開放する。本気で何を教えたんだこの人は・・・。
何はともあれ、コレでやっと着替えれる・・・。よだれとか、もういいんじゃないかな？

「ところでちびっ子、メリーさん？聞きたい事があるんだけど」
「はい？何でしょうか？」
「庭で、一体何してたの？」
「・・・」
「・・・」

二人とも沈黙したままで私と視線を逸らす。

「な、に、し、て、た、の？」

「ひゃ・・・」

精一杯の笑顔を作って問いかけると、ちびっ子が小さく声を漏らした。

「そ、そんなところ行ってませんよ。ね、ねぇ？ユメさん？」

「う、うん・・・」

へー、行ってないのかー。

「そう・・・ところで知ってる？カビって湿度の高いところで生えるんだって？」

「「・・・」」

「最近は空気が乾燥してきたけれど・・・この時期でも濡れたまま乾かない服とかあったらどうなると思う？」

湿ったままの服・・・ちゃんと乾いたらいいよねー？と遠くを見ながら呟くと、二人の顔色が目に見えて悪くなった。

「・・・ごめんなさい謝りますからからカビだけは止めてください」

「何で謝るの？行ってないんでしょ？」

「い、いやー・・・ソレはそうなんですが・・・あはは－・・・」

乾いた笑いをこぼしているメリーさんを同じく乾いた視線で見つめる。

見つめる。

見つめる。
見つめる。

「ごめんなさい見に行きました・・・で、ですが！それもコレもユメさんが見たいって言うからですね！」
「メ、メリーさま！？メリーさまだってもう一度見たいって・・・」
「ユ、ユメさん！ソレを言ったら・・・ひっ」
「へー？そうなの。人が何とか足がかりを掴もうと苦労してる間に・・・それはそれは楽しそうなことして・・・本当、私も混ぜて貰いたいくらい」
「・・・」
「いい？別に見に来たから怒ってるわけじゃないの」

一つため息を付くと、しょぼんとした様子の二人を見ながら告げる。

「街に入ったときに決めたでしょ？二人とも目立つんだから不用意に動かないって」

見つかって騒ぎになるとか・・・洒落にならないわよ。今までの努力が全て潰れるじゃない。

「ごめんなさい・・・」
「・・・まぁいっか。何事も無かったし」

そう告げると布団の中に潜る。
正直、今日は疲れた。

「あのー・・・ルカさん？」
「んー？」

「服は・・・どうしたら・・・？」
「外にでも干しとけば明日にでも乾くでしょ」
カビらせるとか、本気でするわけないじゃない。そもそも出来ないし。
そのとき二人がどんな顔をしていたのかは、溶ける様にして意識がなくなった私にはわからない。

□　□　□　□

街灯も無い、月明かりだけが頼りとなる深夜の街を三人で並んで歩く。動く時は三人一緒にするのが無言で交わされた約束。
そうすると、眠り姫を守る人が居ないのだけれど・・・まぁ平気でしょう。
一昔前は魔術師を名乗っていた人たちが住んでいたと言う地域に今見えるのは、朽ち掛けた住居にコンクリの壁やら、雑草の伸びまくっている庭ばかり。・・・人の住んでいる気配は皆無と言っていいわね。
私たちの泊まっているところを街外れと呼ぶなら、今歩いているところは・・・廃墟？
物知り爺さんという名のセクハラ爺は、私が訪れるとすぐに魔法使いのことを連想したらしい。
そんなコート着てる奴はこの街にはそう居ないとか何とか。二言目に、私は安産型のお尻だとかのたまったので、危なくその少ない寿命を縮めて新世界に蹴り落とすところだったけれど。
どうやらお爺さんと魔法使いはそれなりに親しい仲の様で、泊まっていたらしい場所のこともあっさり教えてくれた。
ただし、最後に来たのは3日程度前・・・今も居るかどうかは行

って見ないとわからない。
というより、情報駄々漏れなんだけれど・・・いいの？

「人気が全く無いのですね」
「深夜ですからねー。皆さんおねむ何でしょう」
「ふむふむ」
「ユメさんはまだ平気ですか？」
「だいじょぶー」

二人の気が抜ける様な会話が夜闇に響く中、どうやら目的の場所に着いた・・・かな？
いささか信じられないので、何度も地図とその家とを見比べる。

「ここ・・・ですか？」
「ここ・・・だと思う」
「ぼろぼろー」

着いた家は辛うじて雨風が凌げるかな・・・？と言える元家らしき2階建てのコンクリの箱。壁にところどころ穴が開いてるし、風は凌げないか。2階に至っては屋根すらも無い。
それにしても、何でこんなところを選んだんだろ。五十歩百歩とはいえ、もっとマシな家はそこら中にあるのに。まさか現地住民に気を使ってるって事は無いでしょう。
メリーさんも同じ感想らしく、表情がよろしくない。ちびっ子はとろんとした目でその家を見つめ・・・も、もしかして眠いの？

「ま、まぁ何か理由があるかもしれないですし・・・入ってみますか」

ランプを手に恐る恐る先導を切って中へと入ってくメリーさん。

何があるかわからない、というのが一番怖い。
ランプで照らされた1階の部屋には、腐った椅子やテーブルに壊れたテレビ、他と比べると綺麗なクローゼットに少しだけ違和感を感じるも、外見と対して変わりは無いわね。つまり生活感皆無。
2階は・・・正直あまり行きたくない。何でこの家壁はコンクリートの癖に階段は木製なのよ！
パッキンパッキンと腐りかけた椅子やテーブルをユメが壊して遊んでいる音を背景に、二人で顔を見合わせる。
無言で交わされる議題はもちろん・・・どちらが先に2階へと上るか。
メリーさんの目に断固として引かない意思が見えるし、当然ソレは私にもみえているでしょう。つまり議論は平行線。決着をつけるにはアレしかない。
さっとお互いに飛びのいて距離を取ると、右拳を腰の後ろに隠す様に構える。メリーさんは左手で右手を包み込む構え。

「むー？」

お互いに緊張が走る中、私たちの様子をちびっ子が不思議そうに見ている。
後は何かきっかけさえあれば・・・戦いは始まる。

「・・・へっくち」

ちびっ子がくしゃみをした瞬間、私たちは同時に動いた。溜めていた拳が突き出され、勝負は一瞬で終わる。

「そんな・・・」
「ふっ・・・強敵でした」

ゆっくりと崩れ落ちる私と、勝ち誇った様子で不思議そうに私を見ているちびっ子の頭を撫でているメリーさん。今この瞬間、明暗が明確に分かれた。

私が出した手はグー、対するメリーさんは・・・パー。

つまり、私が上らないといけない。

「ではではがんばって下さいねー」

「コレ・・・ホントに平気だよね?」

「大丈夫ですって!ユメさんもそう思いますよねー?」

「ねー」

適当なことを言いながら、笑顔で顔を見合わせる二人。畜生・・・登らない奴は気楽でいいな・・・。

目の前にあるのはいかにもな外見の階段。雨風に晒された木は既に変色して独特な色合いになっていて、コイツはかなり拙いぜ!と私の第六感が告げている。というか、正常な感性の持ち主なら一目見ればわかる。

でも悲しいけど・・・私たちの追っている奴は正常とは言い難いのよね。

ここで何時までも怖気づいていても何が変わるわけでもないし、気合を入れて行くことにしよう・・・。

一歩、月明かりに照らされている階段へと片足を乗せると、とても柔らかい感触。うわ・・・ギシッといった。

二歩、もう片足を次の階段に乗せる。壊れる気配は無いし・・・意外と平気かも?

三歩・・・四歩・・・となるべく衝撃を与えないように一歩ずつ登っていく。

そして五歩目に嫌な予感がして後ろを振り向いた時・・・その瞬間が来た。

私の命綱である木の板はもう限界とも言える様な切ない音を立て、

後ろを振り返った私を地の底へと叩き落とす。
せめて柔らかいところに落ちますように・・・。
祈りも空しく、私の身体を衝撃が襲う。

「うわー・・・綺麗に落ちましたね・・・」
「ルカ!?」
「あ・・・ユメさんそっちはあぶな・・・」

けれども、落ちた私を追撃する影があった。何を考えたのか、ちびっ子が階段をぶち抜き、哀れにも衝撃で動けない私に止めを刺そうと落ちてきた。
私が何をしたというの・・・。
ゆっくりと、時間が止まったかのように落ちてくる死神を見つめながら、心で涙を流す。
そして言葉に出来ない痛みが腹部を襲って、私の意識は途切れた。

□　□　□　□

あ、今アリスと通じ合えた気がする。

「ルカさーん?生きてますかー?」

ふふ・・・全く甘えんぼさんなんだから・・・。

「ちょ、ちょっとルカさん!?」

腕を伸ばしてアリスを抱きしめると、とてもやわっこい感触。ああ・・・至福の瞬間。

けれども、その至福はすさまじい痛みを伴って消えていった。

「目は覚めましたか？」

「・・・はい」

痛みで目を覚ますと、数センチ先にメリーさんのニコニコ顔。ヤバイ・・・すっげぇ怖い・・・。

余りにも見てられないので視線を横にずらすも、あるのはただ闇だけ。

み、味方は！？味方はいないの！？

「目を覚ましたなら、手を離していただけるとありがたいのですが？」

「ひっ・・・は、はい・・・」

慌てて手を離すと、どうやら離れ際に鳩尾に一発入れた様で痛みに悶絶した。

「だいじょぶー？」

「だ、だいじょばない・・・」

鬼が去ってから差し出させたちびっ子の手に捕まって立ち上がってみれば、さっきまで居た部屋じゃ無いみたい？・・・暗くてよく見えないけれど。

「ここは・・・？」

「地下室みたいですねー、どうもここで生活してたみたいです」

何処からかメリーさんの声がすると、明かりが灯された。

見えてきたのは割れた皿やまだ綺麗なベットに机。空になった缶

詰とかガスボンベの缶等など・・・。
　生活感は溢れてないけれど・・・上よりはマシね。そういえば埃も無い。
　壁にはチョークで地図らしきものが殴り書きされていて、その地図の上のほうに銃痕がある。コレって、もしかするとアレよね？

「ルカさんルカさん、旅をしてたって言ってましたよね？その行き先ってどうやって決めてました？」

　その銃痕を見ながらメリーさんがポツリと聞いてくる。

「・・・分かれ道があれば棒倒し、水の流れに街はある、道の先には何かがある・・・ね」
「どういうことー？」
「つまり適当」

　何も無い天井を見ながらちびっ子に答える。
　つまりここに居た奴は壁に地図を描いて、適当にぶっ放した弾で行き先を決めたわけか。しかも・・・よりにもよって北の方に・・・。

「北・・・ですか」
「さむーいところなのです？」
「さむーいところなのです」

　まぁ何にしても、ココにはもう誰もいないし誰も来ないでしょう。行き先を決めた以上、其処に留まる事は無いのだし。
　用は済んだのでぞろぞろと家から出る。どうやらクローゼットの中に入り口があったみたい。
　大体1時間程度しか篭っていなかったはずなのだけれど、なんだ

か外の空気がとても新鮮に感じられる。足元が抜ける心配をしなくて良いって・・・すばらしい。
　他の二人も同じ気持ちなのか、思い思いに伸びをしたり空を見上げたりして地上へと出た喜びを表してる。私も釣られて空を見上げると、其処には降ってくるんじゃないかと心配になってくる星空。
　この星空を見るためにこんな廃墟に居たって可能性は・・・否定できないかな。

「ここでなにをしている！」

　そんな気の抜けたことをしていたら、突如罵声とライトを向けられる。・・・お家に帰るまでが遠足なのに、最後の最後で気を抜いた。
　見れば黒い軍服と小銃（アサルトライフル）を構えている男たちが都合四人ほど。残党狩り・・・でもなさそうだし、見回りの連中かな。

「私たち廃墟を巡る旅をしていまして、ここにもあると聞いたので見て回ってたんです」

　笑顔で息をするようにさらりと嘘をつくメリーさん。こういう手腕はさすが。
　相手さんもその笑顔に毒を抜かれたのか、若干緊張を緩め、その後になにやら嘗め回すような目つきで此方を見てくる。

「ボディチェックをする・・・両手を上げて後ろを向け」
「はいはいー」

　大人しく両手を上げて後ろを向けば、無遠慮に私の体をまさぐって来る誰かの手。

「やっ・・・」

隣でちびっ子の小さい声がした。こいつら、子供でもお構いなしなのか？

暫らく大人しくしていると調子に乗ったのか、手がコートの中にまで入ってきたけれど、目を閉じて無反応を貫く。まだ我慢できる範囲内だし、あまり事を荒らげたくない。

そしてその手がコートから服の中へと入ろうかとした瞬間、ちびっ子の後ろに居た男が吹っ飛んだ。

・・・限界か。

閉じていた目を開くと、後ろであっけに取られている男を裏拳で殴り飛ばしてからナイフを抜き、メリーさんの方に居た奴の首を切り裂く。血を吹きながら倒れるそいつの拳銃を抜いておくことも忘れない。

私たちの動きを見張っていた奴が小銃を構えるけれども、地面から生えてきた触手がそいつを叩き潰した。後に残るは潰れたお肉と骨の塊。

け、結構えげつないのね。

「ご、ごめんな・・・」

「もう大丈夫です。よくがんばりましたね」

メリーさんがちびっ子の体を抱きしめながら落ち着かせている中、倒れた衝撃と突然の仲間の死にまだ体が付いていけていない男へと歩き寄り、逃げないように踏みつける。ちびっ子に殴られた奴の止めは・・・一応しておこうかな。

「た、たす・・・」

ちらりと動かない男のほうを見てからそいつの頭へと銃を向ける

と、何かを言う前に引き金を引いた。
静かな廃墟に数発の銃声が響き渡る。

「コレからどうする？」
「ここには居られませんし・・・移動してもいいんですが・・・」

中身の無くなった拳銃を捨ててからメリーさんに聞くと、少し歯切れの悪い返答を残して夜空を見上げる。
そして、悲しいことに私には彼女の歯切れが悪い理由が何となくわかってしまった。

「彼のことなら気にしないで」
「ですが・・・別れとか色々必要じゃないですか？」
「いいよ。別れ話とか嫌いだし・・・それに」
『…ばい…ばい…ルカ…さん』

頭にこびり付いたまま離れないあの子の声を思い出しながら、にっこりと微笑む。

「これ以上、ここに留まる必要は無いでしょ？」

□　□　□　□

ちょこちょこと支度はしていたけれども、いざ出発となると色々買い足さないと行けないものがある。主に食べ物とか。
そんなこんなで動けないまま、２日が過ぎた。
目撃者は全員喋れない状態にしたのだけれど、念には念を入れるとか何とか、外出時には和服にならないといけなくなったのがとて

も辛い・・・。
メリーさんは笑顔で新しい服を次々と出してくるし・・・。
服も着替えていざ出発・・・というときにドアがノックされる。
外からはルームサービスだか何だかと聞こえてくる。

「ちょっと今手が離せないので、ユメさん出てもらえますかー？」
「はいなー」

台所に立っているメリーさんがそう言うと、私の着物姿をまじまじと観察していたちびっ子がとてとてとてーとドアへと駆けていく。
はてさて？ここにルームサービスなんて気の効いたものあったっけ？
悩んでいる間にもゆっくりとドアが開かれる。隙間から見えたのは・・・小銃。
私がとっさにちびっ子の元へと駆け寄る間、不幸中の幸いとも言える事態が起きた。
相手側もまさか子供が出ると思わなかったのか、引き金を引くのを一瞬だけためらった。

「ほぇ・・・？」
「っ！」

その一瞬の間にちびっ子の体を抱えて横へと飛ぶと、見た目に反して小さい銃声と共に銃弾が撃たれて私の右腕を撃ち抜いていく。
そのままトイレの扉へと激突していると、メリーさんがドアを蹴り閉めてお札の様な物を貼るのが見える。

「ちびっ子、怪我は無い？」
「ルカ・・・血が・・・」
「私は平気だから落ち着いて・・・ね？」

少し錯乱気味のちびっ子を抱きしめて落ち着かせると、怪我の有無を確かめる。服が赤く染まっているのは・・・私の血かな?何にしても、怪我は無い様で何より。

「撃たれたんですか?止血しますから、見せてください」

二度、三度とドアが叩かれる中、メリーさんが撃たれた部分を治療し始める。ドアの外からは開かないとか魔術師だとか騒いでいるのが聞こえてくる。

「結界はどれくらい持ちそう?」
「即席ですから・・・そうは持たないですね」
「正面突破はどう?」
「破られた瞬間に弾以外のものが飛んでくる可能性もありますから、あまり現実的じゃないです」
「・・・あの触手は?」
「あの子達は地面が近くないと呼べないですから・・・少なくともここに居る間は無理ですね」
「そう・・・」

そんな中を眠り姫を連れて逃げ出さないといけないわけか・・・。良い状況とは言えない。

治療も終わったようなので立ち上がってコートを着込むと、ビニール紐を筒の足に結びつける。途中でほどけられたら洒落にならないので、左手と歯を使ってしっかりと結ぶ。

「何するんですか?」
「ちょっくらドアの向こうの連中に挨拶してくる」
「ダメなのです!」

悠々と準備をして窓へと向かおうとしたら、ちびっ子に裾を掴まれた。

「ルカは怪我してるのですよ!?そんな危ないこと・・・」
「怪我してるからよ」

思わず哂いをこぼしてからちびっ子へと向き合うと、彼女は驚いたように目を見開いた。

「もしも耐え切れないで正面突破となったら、私が一番足手まといになるじゃない。だったら、捨て身の役は私がするのが最善でしょ？」
「で、でも・・・」
「いい、ユメ？」

理屈でわかっていても、感情が納得しない様子のちびっ子と視線を合わせる。

「あなたは私が死ぬとでも思ってるの？」
「・・・思ってない」
「それじゃ、私が少しだけ留守にする間、皆を守れる？」
「・・・うん」
「いい子ね」

こくん、と頷いたちびっ子を撫でながら立ち上がり、水の入った小瓶をポケットへと入れると、割れた窓ガラスの外へとビニール紐を落とす。

「そんな訳で少し出るわ。出来る限り早く帰るつもり」

「お帰りの際はお風呂にしますか?ご飯にしますか?それとも・・・?」

「暖かく出迎えてくれると嬉しいかな?」

そういって笑うと、紐を持って窓から飛び降りる。

どうやら外にも居るらしく、飛び降りている私を狙って銃声が聞こえてくる。

減速のためにと思って持っているビニール紐は、摩擦で擦り切れた血で滑って狙ったほどの効果は期待出来そうにない。

何とか地面に着地してから、木陰へと転がり込むと銃弾が飛び交ってきた。ヒビでも入ったのか、足が熱と痛みを持った自己主張をしてくる。

まぁ・・・意識さえあれば動くし問題は無いか。

とにかくここで立ち止まっている訳にはいかないので、銃声が止んだ隙に割れている窓から中へと転がり込む。

受身も取れずに畳へと落ちれば、口の中に広がるのは鉄の味。

見れば止血した傷が開いた様で右腕からはじんわりと血が染みてきている。

好都合なので体を起さずビンを開けると、染みている右腕へと水を流しかける。血を使うのはもっともわかりやすい禁忌の証・・・か。

『・・・遠き日の思い出をこの手に』

静かに呪文を唱えてから指を鳴らすと、すぐに霧が立ち込めて来て、やがて数センチ先すらもよく見えなくなった。

私はそれを確認すると、頭痛が酷くなっていく頭を抑えながらゆっくりと立ち上がって歩き始める。

「・・・あはっ♪」

屋内だと言うのに、昼間だと言うのに・・・霧の中に月が見えて、思わず笑いがこぼれる。

・・・いけないいけない。誰も聞いてないとはいえ、淑女たるものそう易々と笑いをこぼしてちゃダメ。

足を引きずりながら廊下へと出ればそこにも霧は立ち込めていて、足元には少しずつ量が多くなっていく水の流れ。時々何かが跳ねるような音が小さく聞こえてくる。

転ばないようにゆっくりと、1段1段踏みしめるようにして階段を上っていくと、目的の階へと着いた。

件の連中は突然現れた霧に警戒を強めている様子だけれど、その程度の警戒じゃ何の意味も無い。

静かに一人の下まで駆けると、その首目掛けてナイフを振りぬく。返す手で他の奴の背中へと突き刺せばプリンを貫くような柔らかい手ごたえ。そのまま二人とも静かに崩れ落ちた。

異変に気付いたらしい一人が小銃を構えようとするのを腕を切り落として止め、もう片方のナイフを頭へと振り下ろす。

後は扉を見張っていた最後の一人の首を後ろから切り落とせば処理はおしまい。

頭に刺したナイフを回収していると、待ってましたとばかりに水の流れが次々と死体を飲み込んでいく。

くちゃくちゃきぱきぱきとと死体を咀嚼する音が鳴る中、不意に体を支えきれずに壁へと寄りかかる。走った反動で足と頭が痛い。

「大丈夫だから・・・食べるなら早くね」

咀嚼を止めて心配そうに此方を向いた人魚へと告げると、月から逃げるように目を閉じる。何も見えない身体に、霧が纏わり付いて来るのが少しだけ心地よい。

やがて全て終わったのか、目を開くと血溜まりだけが残っていた。

さてさて・・・どうしようか？
ぱちんと指を鳴らして霧を晴らすと少し考える。
目の前には結界で封印されたドア、当然ながら普通に開けようとしても開かない。かといって大声を上げてメリーさんたちに呼びかけるのものも・・・何か嫌だ。そうとなれば・・・。
うん、強引にこじ開けることにしよう、そうしよう。
そう決めると目の前の扉を見つめ、隙間へとナイフを差し込む。
そのまま隙間をなぞる様にして動かせばあら不思議。てこでも動かないと思われた扉が開き始め・・・。
始めた瞬間、中に居たメイドの誰かさんがドロップキックを入れてくれた。
当然、暖かい歓迎の言葉が来ると思っていた私は、ぼろきれの如く壁へと叩きつけられて意識を手放しかける。

「わ・・・わっ・・・！メリーさま！メリーさまー！」

そのまま誰かさんに足を掴まれるとずるずると部屋の中へと引きずり込まれる。傍から見たら殺人を隠そうとしてる状況に見えるに違いない。未遂だけど。

「ありゃりゃー、コレは折れてますねー」
「ず、随分と暖かみのある出迎えね・・・」

それはもう、暖かすぎて寒くなるくらい。

「ごめんなさい・・・」
「まぁまぁ、ユメさんも悪気があったわけじゃ無いんですからー。・・・それにしても、また随分と無理しましたねー」

笑いながらも処置を進めていくメリーさん。早いか遅いかは・・・

比較する対象を他に知らないからわからない。
出来れば痛みも和らぐようにして欲しいのだけれど、笑ってスルーされた。

「一通りは終わりましたけど・・・あくまで応急処置なんですから、あんまし派手に暴れちゃダメですよ？」
「りょーかい」
「ではでは、私は荷物を持ってきますから少しお待ちを」
「ほら、いつまでしょげてるの」

奥でごそごそとし始めるメリーさんを眺めてもしょうがないので、ちびっ子の頭を撫でると立ち上がって数歩歩く。多少はマシになったかな？

「ルカ、ルカ？」
「んー？」
「・・・怒ってない？」
「・・・怒ってる」
「いひゃい！いひゃいです！」

びよーんと伸ばしながらメリーさんが来るのを待つ。それにしてもまさか荷物って・・・眠り姫のことじゃないよね？
そんなことは無かったようで、数秒もするとバックを背負い眠り姫を抱えた割烹着が現れた。改めて見るとすごい組み合わせね。

「ではでは、しゅっぱーつ」

状況がわかってるのかわかってないのか、メリーさんはのんきな顔で出発の合図を出す
先頭をちびっ子、中間をメリーさん、殿を足手まといと言う3人

パーティで廊下をぞろぞろ歩く。穴は後ろだけれど、奇襲を掛けるには何処かに隠れているか、壁のぼりでもしないと無理ね。

別室の扉が開いてたのでちらりと見れば、子供も大人も関係なしに死んでいるのが見える。どうも泊まってる人は無差別に襲ったみたい。銃声が小さかったのもそれが理由か・・・。

「無差別ですか・・・どっちが危険なんだか」

ポツリとメリーさんが呟くのが聞こえる。

その後は何事も無く1階まで降りられた。来るときも感じたけれど、ここに来ている人数はさほど多く無いみたい。なるべく穏便にしたいのかな。

「待ってください・・・」

階段の一番下へと着いたとした瞬間、ちびっ子から制止が掛かる。

「居る？」

「二人、こっちに来てます」

まぁアレだけ目立つことしたんだし、増援も来るか。けれど増援も少ないし、やっぱり大手を振って大々的に来てる訳じゃないみたいね。

「どうする？2階から飛び降りる？」

「そうですねー・・・」

「ユメに任せてください」

二人して悩んでいると、ちびっ子がにこりと笑って居なくなった。

それは文字通り、消えたと言っていいほど。

慌てて通路から覗くと、一人はすでに倒れており、凍ったように固まっている最後の一人をちびっ子が砕いているのが見える。きらきらと、数秒前まで人だったはずの赤い破片が通路に広がる。

「「・・・」」
「終わりました」
「い、行く？」
「そ、そうですね・・・」

褒めて褒めてーとばかしに近寄ってくる、ちびっ子の冷たい頭を撫でながらメリーさんに言って歩き始める。も、もしかすると、この子が一番危ないのかもしれない・・・。

溶けて肉片となった欠片が散らばる通路から、誰かさんが動かぬ体となって転がっている部屋へと入れば、駐車場が開けた窓から見える。何を考えて窓の先を駐車場にしたのかという疑問はあるけどこういうときはありがたい。

後は車へと乗り込んで逃げるだけ・・・なんだけど。

「居ると思う？」
「居ると思います」
「だよねー」
「むー？」

絶好の開けた場所に見えるのは、逃げようとして失敗した様子の誰かさんの死体。部屋の中から撃たれたんじゃないのなら、どう見ても待ち伏せされてるよね、コレ。

中にも死体、外にも死体。連中は素人を巻き込んでまで魔女狩りを進めたいのか。

「ということで、第一回作戦会議を開催しますー」

「わーわー、ぱちぱち」

出来る限り窓から見えないようにして、メリーさんが作戦会議を始める。

「まずユメさんが車まで行ってドアを開ける・・・出来ますか？」

「出来るー」

「うむうむ。次に私とルカさんが車までダッシュ！完璧な作戦ですね！」

作戦ですら無かった。

ところで１０秒で終わる会議は会議と呼べるんだろうか？

まぁ・・・他に案も無いんだけど。

「ではではー、始め！」

メリーさんが告げた瞬間、ちびっ子の姿が消えた。続くようにして窓から出れば、既にドアに手を掛けて開けようしているのが見える

走る私たちを守るように触手が壁を作っていく中、やっぱり足の怪我が響いてるのか、メリーさんのほうが前を走っていく。

私を守っていた触手が居なくなったので、触手連中は眠り姫を守ることに全力みたいね。

それでも全力で駆けて、あと少しで車に着くと言った所まで何とか来きたところで、大きな銃声と共に私の体を衝撃が襲った。

「ルカ！」

胸から赤い何かが吹き出て、崩れていく私の体をちびっ子が車の中へと放り込めば、そのまま扉を閉める事もせずに急発進を始めた。

「ユメさん止血を！」
「ルカ！意識を手放しちゃダメなのです！」

二人の声が何処か遠くに聞こえてくる。
途切れ途切れになる意識の中で。浮かんだのは、ちびっ子でもアリスでもメリーさんでもなく。何処か寂しげにくすりと笑うアイツの姿だった。

旅に危険は付きものです（後書き）

１ヶ月近く間が開きました
お久しぶりです
なるべく早く書くとか言って１週間も掛かるんだね、馬鹿だね
今回お友達が多忙に付き誤字チェックを自前でしたので少し甘いかも？

さてさて、世の中にはあとがきから読む人とあとがきを最後に読む人、あとがきは読まない人の３種類が居ると思います
つまり大事なことは前書きに書けということですね！
つまり考えたネタは前書きにぱなせということですね！
気分転換なのでつまらなくても気にしない

まぁ後は近況報告なので興味の無い人はスルーしてください
さてさて、季節の変わり目は調子を崩すといいますが・・・
中の人は首が回らなくなりました
一時右腕が上がらなくてこいつは拙いぜ！とかのんきに言ってたんですが、今回は首が回らなくなりました
もうね・・・９０度も横向けないんだ・・・
身体を回さないと私の視界は前方１８０度のみで出来ています
回すとパキッとなりますし、こいつは拙いかもしれないぜ！

それが原因かどうか知らないですが、精神状態もあまりよろしくないです
どうでもいいことにイラッ☆とする日々
愚痴る訳にもいかないですし、あまりに酷いのでネット上でも変なことは言わないように気をつける日々

まぁ、何がいいたいかと言うと、次話は遅れると思います
方針は決まってるんですが・・・ネタが・・・出ないんです・・・
めっさ短いのは避けるようにしますので、ゆるりとお待ち頂けたら幸いです

ではでは、少しでも楽しんでいただけたら幸いです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1963w/

あなたは笑ってくれますか？

2011年11月8日03時06分発行